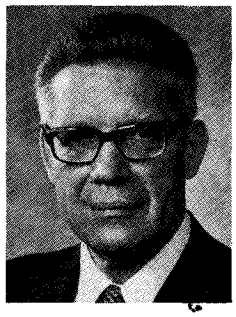
聖徒の道 1977年9月20日発行（毎月1回20日発行） 第21巻第9号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

聖徒の道

9 1977



末日聖徒イエス・キリスト教会

1977年　9月号

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプレー
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト

諮問委員会

ゴードン・B・ヒンクレー
マービン・J・アシュトン
L・トム・ペリー
マリオン・D・ハンクス
ジェームズ・A・カリモア
ロバート・D・ヘイルズ

教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

国際機関誌

ラリー・ヒラー（編集主幹）
キャロル・ラーセン（編集副主幹）
ロジャー・ギリング（デザイナー）

「聖徒の道」

八木沼　修一（翻訳部長）

もくじ

モルモン経……N・エルドン・タナー……389
インディアンの伝説……フランクリン・S・ハリスIII……393
日々の恵み……397
シオンの建設……ブルース・R・マッコンキー……400
質疑応答……アレン・E・リッター……404
おもちゃばこ……405
コリーのバプテスマ……406
火の柱……マーベル・ジョンズ・ガボット……410
おかしな鳥……ジョン・ラブランド……412
レッスンの準備……セオ・E・マキーン……413
目的をもって教える……ボイド・K・パッカー……415
リーハイの道を求めて……リン・M・ヒルトン，ホープ・A・ヒルトン……418
ローカル・ニュース……426

聖徒の道 9月号

発行所　末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5－8－10
印刷所　株式会社　精興社
配　送　東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4-9-19
定　価　年間予約1,700円　1部150円
海外予約1,700円
INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

郵便振替口座番号　東京0－41512
口座名　末日聖徒（まつじつ）イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

大管長会メッセージ

“モルモン経”

第一副管長
N・エルドン・タナー

モルモン経は人間とその本性に関する最もすぐれた研究書のひとつであるというのが，私の持論である。

そこに描かれているのは人間の本性の両極端であり，一方は霊的に秀でて本質が善良な人間と，もう一方は残忍，邪悪で権力の欲に駆られた人間である。もちろん両極の中間に位置する人々もいるにはいる。しかし，このニーファイ人の記録では，主に仕えて豊かな祝福と正義の報いを受ける人々と，悪の道に従って，ベンジャミン王が言うように「身も霊も救いを受けることができない」（モーサヤ3：18）人々のことがおもに語られている。

私はモルモン経が，イエス・キリストが人類の贖い主，救い主であることの第二の証人として強調されていることに全く賛同する。実際，十字架につけられ，その後復活されたキリストを証するのに，アメリカ大陸の父祖リーハイの子孫たちにキリストが姿を現わされたというモルモン経の記録にまさる証人はない。またここに，モルモン経から学ぶことのできる実に大きな教訓のひとつがあるのである。

この約束の地に集まっていた群衆は自分たちの前に現われたもうた御方が復活した主であることに何の疑いも抱かなかったはずである。それは，御子の訪れに先立って，天から次のように告げる御父の声があったからである。「わが喜ぶ愛子を見よ。われはこれに由りてすでにわが名の栄光を示しぬ。わが愛子に聞け。」（Ⅲニーファイ11：7）

さらに救い主御自身，み手を広げながら，次のように言葉を続けておられる。「見よ，われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり」（Ⅲニーファイ11：10）と。

御自身が主である証拠として，その御方は目の前に伏している群衆に向かい，「汝らが肋（あばら）にその手をさし入れ，わが手足にある釘あとに触れて，われがイスラエルの神にして全世界の神なること，またわれが世の人の罪を負うて一度殺されたるを知るために起ちてわれに近づけ」と言われた。

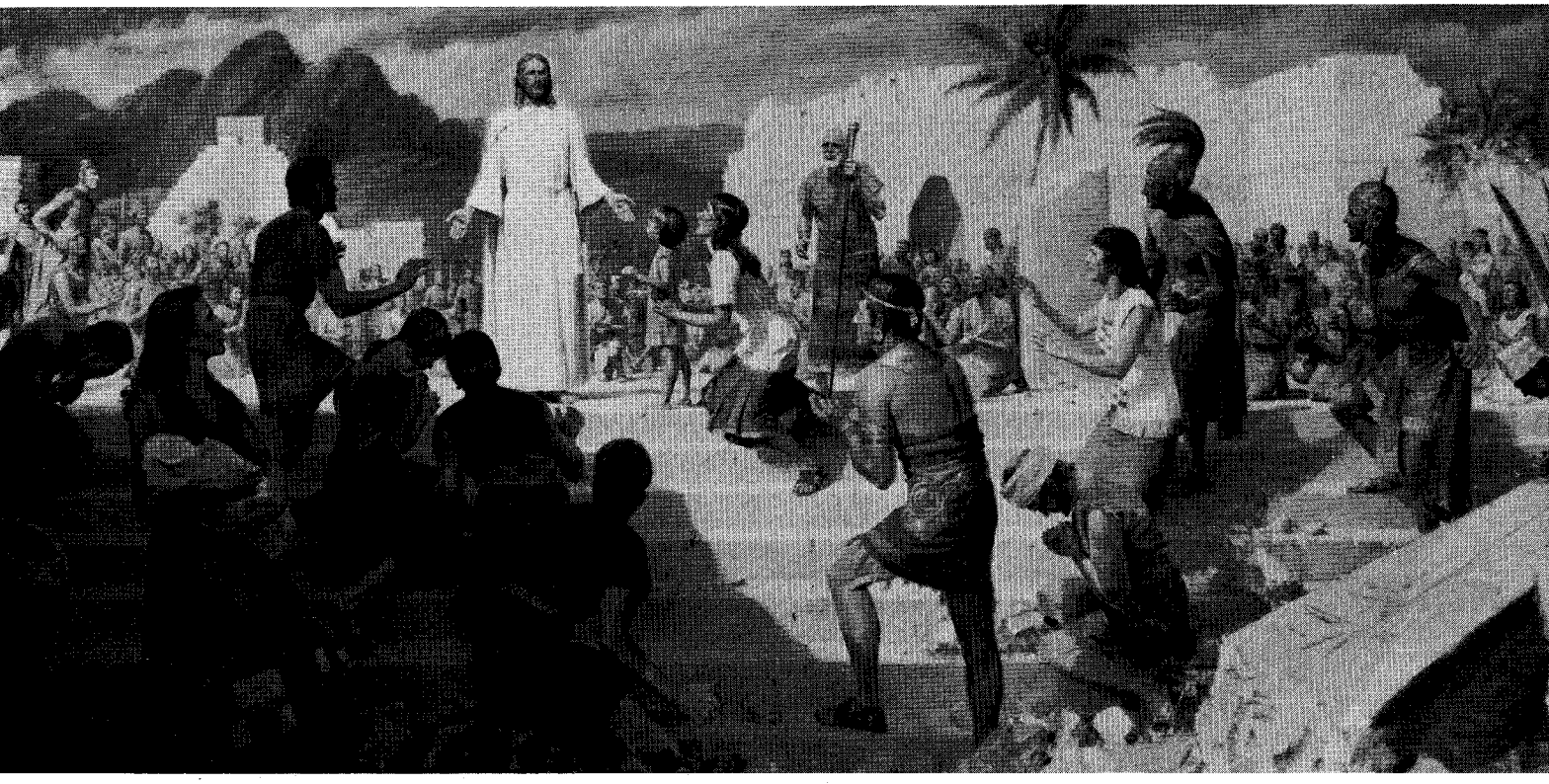
ニーファイ第三書の記録はさらにこう続いている。

「そこで群っている人々は近よってその手をイエスの肋にさし入れ，またイエスの手足にある釘あとに触れた。……人は各々みな近よって親しくこれを見，親しくこれに触れたからみな一せいによばわって，『ホザナよ。いと高き神の御名を讃美す』と言い，イエスの足下にひれ伏してイエスを拝した。」（Ⅲニーファイ11：15—17）

何と輝かしい光景であったことか。ここに描かれている情景は，聖典中でも屈指の崇高なものである。その群衆の中にいて天から下ってくる復活された主を目にした人々は，いかに幸せであったことか。このような霊的な経験は，神と人との交流の歴史で他に類を見ない。

しかし，私たちはこの数節に感銘を受けて心を奪われ，劇的なこの場面から最も大切な教訓を見逃さないとも限らない。

それは，この恵まれた群衆に目を向けて，彼らが南北両方の土地に住むおびただしい人数の民に比較すればごく少数であったことを認めることから始まる。ほかの人々はどこにいたのだろうか。彼らの身には何が起きたのだろう。この光景を目撃するのを許されるのはどういう人々だったのだろうか。



祝福された人々がどんな人々であったかは，ニーファイ第三書からわかる。彼らは「命を助けられた」ニーファイの民と「命を助けられた」レーマン人で，「大きな恵みを受けてその頭の上に大きな祝福を授けられ」た人々であった。そして「キリストは天に昇りたもうてから，すぐにこれらの人々に確に現われたまい，自分の体をかれらに示して祝福を施したもうた」（Ⅲニーファイ10：18—19）のである。

繰り返し言われている「命を助けられた」という言葉が鍵である。彼らはニーファイ人とレーマン人の子孫であったが，さらにどういう人々であっただろうか。次の箇所にその答えがある。

「この時命を助けられた者たちは，民の中で最も正しい者たちで予言者らを受け容れ，石でこれを撃たず，また聖徒らの血を流さなかった者たちである。これらの者は命を助けられて地の中に沈んで埋まることもなく，焼け死ぬこともなく，圧しつぶされて死ぬこともなく，旋風のために吹きさらわれることもなく，烟（けむり）の霧または暗黒の霧のために息が絶えることもなかった。」（Ⅲニーファイ10：12—13）

特に次の節が大切である。

「さてこれを読む者は，よくその意味を会得せよ。聖文を持っている者はよくそれを研究して，以上に述べてある火と烟と大風と旋風と，人や財産を落し入れて埋める地の裂け目とによって起った死と破壊は，みな多くの聖い予言者らの予言の通りに起ってその予言を成就する者であるかどうかを調べてみよ。」（Ⅲニーファイ10：14）

事実，この惨禍は，モルモン経の予言者たちが繰り返し予言してきた通りの出来事であった。滅亡した数多くの町についての「神のみ言葉」からすれば，悪い人々が滅びて「民の中で最も正しい者たち」が命を助けられたと推測できる。

このような話が，モルモン経に載っている。この一大聖典を歴史書として見るならば——私は歴史書だと思うが——これは西半球で盛衰した文明の叙事詩である。民は義しく主を拝していたときに文明の極みにまで到達し，義に背を向けたときに，戦争や騒乱によって滅びの道に足を踏み込んだのであった。

これが，モルモン経からわかる人間の本性である。ベンジャミン王はこれを理解し，民にも教えようと努めている。彼は最後の説教でこのように語っている。

「肉欲に従う人は神の敵であって，アダムの堕落してこの方そうである。しかし，人がもし聖霊の導きに従い肉欲に従うことをすてて主キリストの身代りの贖罪に由って聖徒となり，幼児のように従順で柔和で謙遜で忍耐で愛情に富み，幼児がその父に従うように，主が負わせたもうすべてのことに喜んで服従しないならば，とこしえに神の敵となるであろう。」（モーサヤ3：19）

ベンジャミン王は徳高い人を幼児になぞらえたが，それは決して柔弱な人間になりなさいという意味ではない。モルモン経に登場する偉大な予言者や指導者や軍の司令長官たちは，最も信仰篤く，熱心に主を礼拝する人々であった。彼らは常に神の導きを求め，主と交わった。そのような義に従った父祖リーハイと息子のヤコブ，その息子のイノスに至る3世代の予言者が時の絶頂に主が誕生される何百年も以前に，実際に救い主の姿を見，み声を聞く恵みを得たことを私たちはモルモン経から知る。

モルモン経から得るひとつの大切な教訓は，イノスの体験である。つまり，主の戒めに従っている義人は心を込めて祈り続けるならば，主を見いだすということである。イノスはこう記録している。

「さて，私は自分の罪を赦されようとして，一心不乱に神の御前に祈ったことについてあなたたちに話をしよう。ごらん，私の父が永遠の生命と聖徒の幸福について教えた言葉を度々聞いたのが私の心に深くしみこんだ。そこで私は自分の心が飢えるのを覚えて，私の造り主の御前にひざまずき，自分の身と霊のために一心こめて祈りかつ願った。私は本当に一日中神に祈り，夜になってもまだ私の声が天にとどくほど大きな声で祈った。すると一つの声が聞えて『イノスよ，汝の罪はすでに許されたれば汝は祝福を受くべし』と仰せになった。私イノスは神が必ず偽を仰せにならないことを知っていたから，私の罪はすでにこれで取り消されたのである。」（イノス2—6）

イノスが何の罪に対する赦しを願ったのかわからないが，一番大きいのは疑いの気持ちだったのではないかと思う。もし主が返答される前にイノスが祈りをやめていたら，イノスはどうなったであろうか。

イノスは，主の勧告に従って家族を引き連れてエルサレムを出て，神に導かれながらこの約束の地に人々を導き入れた父祖リーハイから3代目の予言者であった。リーハイ自身の家族は主に義しく仕えようとした人々と，神に背を向けてルシフェルの誘いにのった人々のふたつに分裂した。その対立はあまりに激しく，リーハイの死後すぐに，義人ニーファイの家族と彼に従う人々が身の危険に迫られて新しい土地へ逃れなければならないほどであった。そのときあとに残った者は，不正なレーマンとレミュエルに率いられて神の敵となった。この分裂は，ニーファイの時代から予言者モロナイが記録をクモラの丘に埋めるときまで，モルモン経のほぼ1千年間に尾を引いている。

ここでもうひとつ，イノスの書から人間の性質について学ぶことがある。サタンは悪の道に人を引き入れようとする仕事にさじを投げると思ってはならない。また，ニーファイに従った人々が容易に信仰を保っていられたと考えてはならない。ニーファイの甥のイノスは，その民についてこう言っている。

「ところがニーファイの民は土地を耕してもろもろの穀類や果物を作り，多くの羊の群やいろいろな牛の群を飼い，また山羊や野山羊や多くの馬を飼った。」 ここに，ニーファイ人の繁栄の様子がうかがえる。しかしイノスはこう告げている。

「私たちの中で働いた予言者は非常に数が多かったが，

民はその心がかたくなで解りが悪かった。それであるから非常にきびしく教えることと，戦争不和滅亡についての説教や予言をすることと，死，永遠の来世，神の裁判および神の能力などをたえずかれらに思い起させることと，包みかくさず語ることのほかにかれらが速に亡びるのを止める方法はなかった。それであるから，このようないろいろな方法でかれらをはげまし常に主をおそれ敬わせるのである。私が，かれらについて書きのせることは以上の通りである。私は生涯の中にニーファイ人とレーマン人とが戦うのを見た。」（イノス21—24）

モルモン経の話の典型が，ここにすでに見られる。一応義しいとされる人々の間にも，かたくなで主の道を聞いても理解しない人々がいたというのである。たとえ義人でも繁栄して誇り高く自分本位になり，祝福を与えて下さった御方を忘れたときに，このようなことがよく起きている。

その典型的な例が，先ほど述べた復活した主の来訪に先立つ10年間に西半球の民に起きたことである。ニーファイ第三書の初めの数章には，ガデアントン強盗団としてよく知られている「ガデアントン秘密結社」にニーファイ人が勝利を収めたことが記録されている。主は正義に従ったニーファイ人の指導者たちを導いて勝利を得させ，その結果，ニーファイ人は非常に悔い改めたのであった。

ニーファイ人は敵を負かすと，喜んで主に加護を祈り，「一同歌い出して神を讃美した。」また，「神が大きな恵みを垂れて……から，多くの涙を流すほどの喜びが胸に満ちた。」（Ⅲニーファイ４：31，33参照）

彼らは心から悔い改めたようであった。だれもが，予言者が真理を語っていることを認めた。「また予言者たちの言葉通り多くのしるしが現われているから，すでにキリストが確に降臨したもうていることを知り……かれらの罪や憎むべき行いやみだらな行いをことごとく捨てて夜昼熱心に神に仕えた。」（Ⅲニーファイ５：２，３）

民の悔い改めは非常に大きく，牢屋に行って，捕虜になっていた大勢の強盗に福音を宣べ伝え，悔い改めてもう決して人を殺さないと約束した者を釈放したほどであった。

ニーファイ人は敵によって追われた元の町に帰り，ある町を修復し，またある町を再建した。さらに彼らは町と町をつなぐ道路を数々造り，「栄えて偉大な者となり始めた。」キリスト生誕後の25年頃のことである。聖典には，「それであるから，国内の人民が罪悪に陥ることさえなければ，その繁栄がつずくのを妨げるものは一つもなかった」（Ⅲニーファイ６：４，５）といわれている。

何度も繰り返してきたことでありながら，民は繁栄の誘惑を耐えることができなかった。聖典には，復活された主が現われる５年前の出来事が，次のように記録されている。

「ところが第二十九年になると，国民の中に多少の争いが起り，中には非常に富んでいるから高ぶって大言を吐く者があり，ついにひどい迫害をさえ起すようになった。……民はついにその財産と学問を修める便宜の多少とによって階級に差別をつけ始めた。国民の中のある者は貧乏のために学問がなく，他の者は富があるから多くの学問を修めた。」（Ⅲニーファイ６：10，12）

短期間に高ぶる者とへりくだる者が生まれ，国に不平等が著しくなった。そのために，「真の教えを信仰する僅のレーマン人の教会を除いて，全国の教会はみなつぶれてしまった。」（Ⅲニーファイ６：14）

この不平等の原因ははっきりと告げられている。原因はこうであった。「サタンが民の心を煽動してあらゆる悪事をさせ，高ぶらせ，その心を誘って権力と威勢と財産とこの世の空しいものを貪らせることに非常に力があったからである。このようにサタンが民の心をまどわし，民にあらゆる悪事をさせたから民が平安を楽しんだのは僅に数年に過ぎなかった。」（Ⅲニーファイ６：15—16）

以上の幾つかの例から，モルモン経から得られる大切な教訓がおわかりいただけたと思う。この素晴らしい書物から，主に仕えて神の王国を建設しようとする義人に大きな祝福の伴うことがわかる。偉大な町や文明は正義の原則の上に建てられること，そして国民の間に悪が満ちるとその町や文明の崩壊することがわかる。また，たとえ迫害されても，主に仕えようと努める人々を主が祝福されること，さらに人は聖霊の力を求めてそれを得ない限り，神の敵となるのがその本性であることがわかる。

また，悪に陥る原因に高慢，富，不正な支配，階級差別，利己心，権力欲などがあることもわかる。一方，義人が義人としてあるためには，信仰と神との絶えざる交流，指導者に従う気持ち，神のみ旨どみこころに従う謙遜さなどの大切なことがわかる。

他の聖典も同様だが，モルモン経から学ぶ最も大切な教えのひとつは，神の予言者が予言した出来事は必ず起こるということである。これらの聖い人々はイスラエルの聖者に代わって語るのである。私たちは，予言通りに義人に注がれた豊かな祝福と，悪人を見舞う悲惨な滅亡を目にしている。

このことから，主が大きな祝福を約束する，あるいは滅びが迫ると言っておられるその意味がわかるのである。

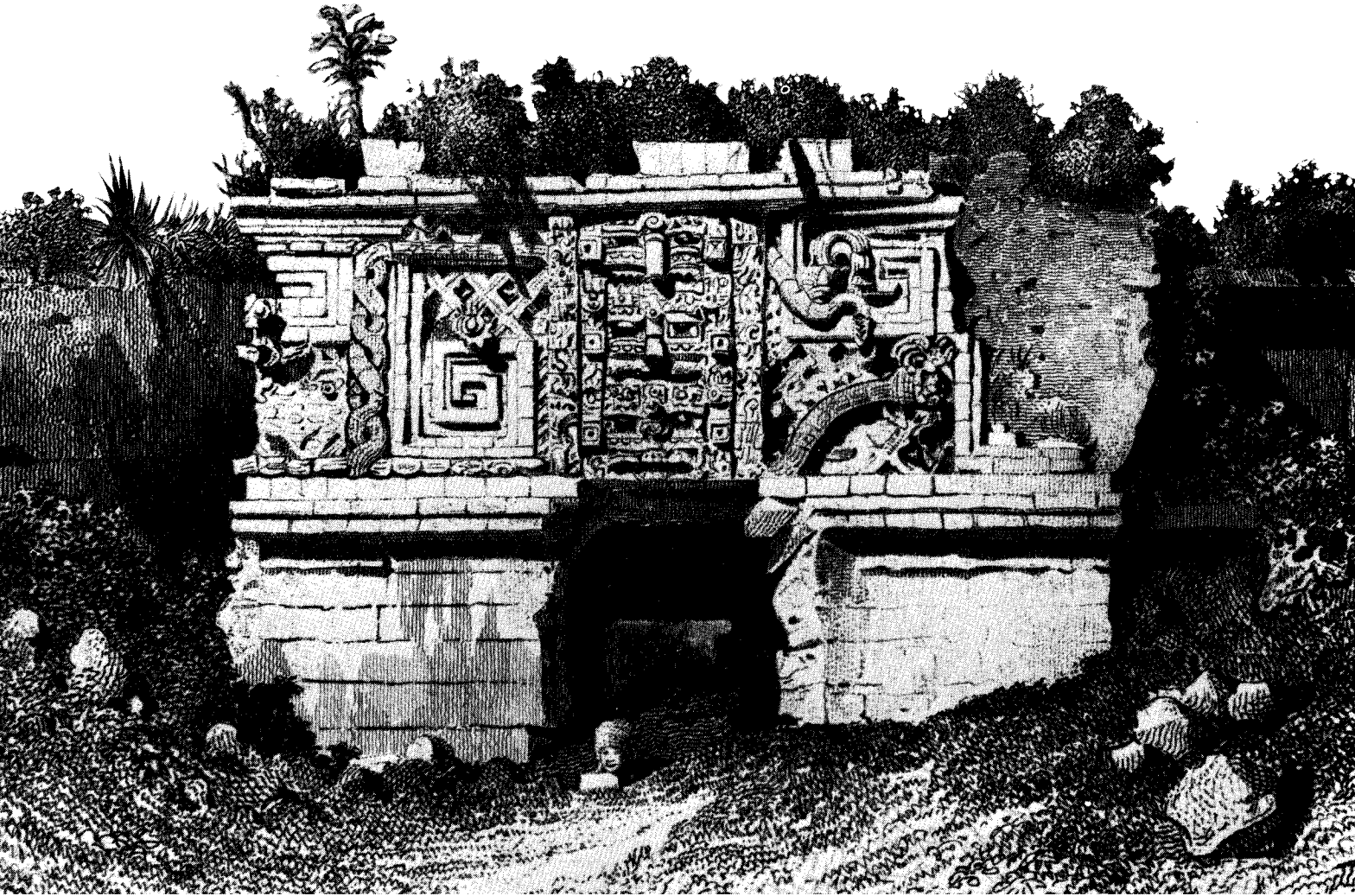
モルモン経を読み，学んでこのような知識から力を得るとき，私たちに，現代を生きるためのより良い準備ができるのである。私たちを取り巻く環境は，ニーファイの民が直面していた状況と大して違ってはいない。モルモン経を持っている私たちは幸いであり，モルモン経の読書と研究をさらに続けるときに，恵みは倍加するのである。しかしその祝福は，霊感によって記されたこの書物から学んだ教訓を実践してこそもたらされるのである。教訓は数々ある。私が触れたのはその中のほんの一部に過ぎないが，しかし大切な教えである。

私はモルモン経を愛し，モルモン経と，私の人生に及んでいるこの聖典の影響に感謝している。従って，この聖典が私たちの主であり救い主であるイエス・キリストからさらに大いなる祝福と承認を得るひとつの手だてとなるように祈るものである。

インディアンの伝説

フランクリン・S・ハリスIII

16世紀のスペインの神父たちは，アメリカ・インディアンの起源に関する伝説を集めている。



マヤ文明の探検家ジョン・ロイド・スチーブンスは，1841年に出版した著書「中央アメリカ，チパス，ユカタンの旅」の中で，古代アメリカ文明の神秘を初めて広く世の人々に紹介した（ジェームズ・S・パッカー『ジョン・ロイド・スチーブンスとマヤ遺跡』「聖徒の道」1977年6月号pp.282—83）。この書物を手に入れたジョセフ・スミスは，非常に感激し，次のような言葉を残している。「このような素晴しい証拠が世にあって私たちを助けてくれることは，実に大きな喜びである。……わずか12年後に，これほど明白にモルモン経を証するものが出ようとはだれが想像できたであろうか。」（*Times and Seasons,* 1842年9月15日pp.914—15）

さて，予言者ジョセフは全く知らなかったことであるが，これより3世紀も前に，新大陸に到着したスペイン人は，アメリカ・インディアンの起源に関するベールをはがそうとやっきになっていた。彼らは古代都市の遺跡ではなく，原住民の伝説にその答えを求めようとした。彼らの働きを，モルモン経が教えている事柄に照らして評価してみると興味深いであろう。

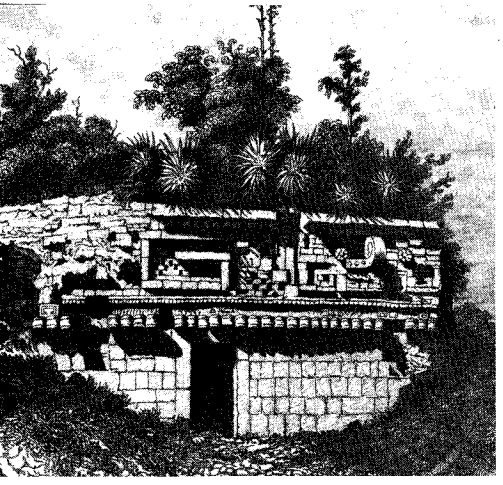
スペイン人は，西半球に全く異質の民がいることを発見した。そこで当然のことながら，スペイン人は彼らの先祖に興味を持つこととなった。そして数人の兵士とカトリックの宣教師たちが，原住民の古文書を調べたり，インディアンに直接尋ねたりして，古代アメリカの歴史を調査した。しかしそうした彼らの調査結果のほとんどが，2世紀以上も日の目を見ることなく，ヨーロッパの記録庫の中でちりに埋もれていたのである。「モルモン経」が翻訳されていた当時，古代アメリカに関する英語の文献は何ひとつなく，またスペイン語でもごくわずかしかなかった。

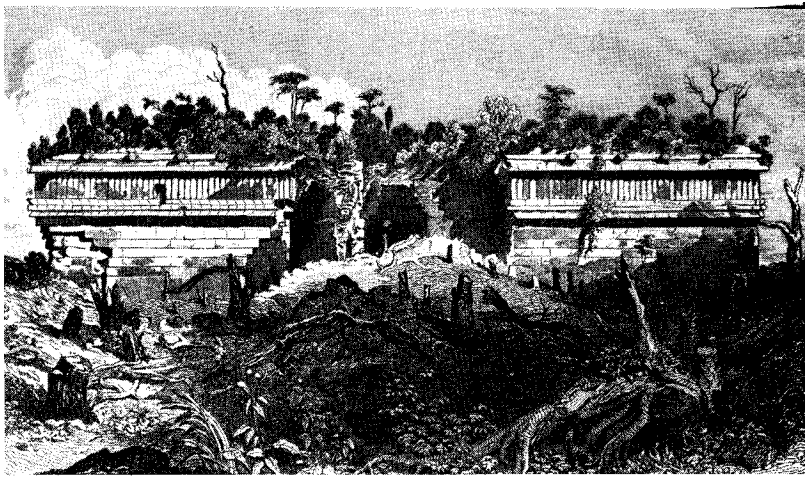
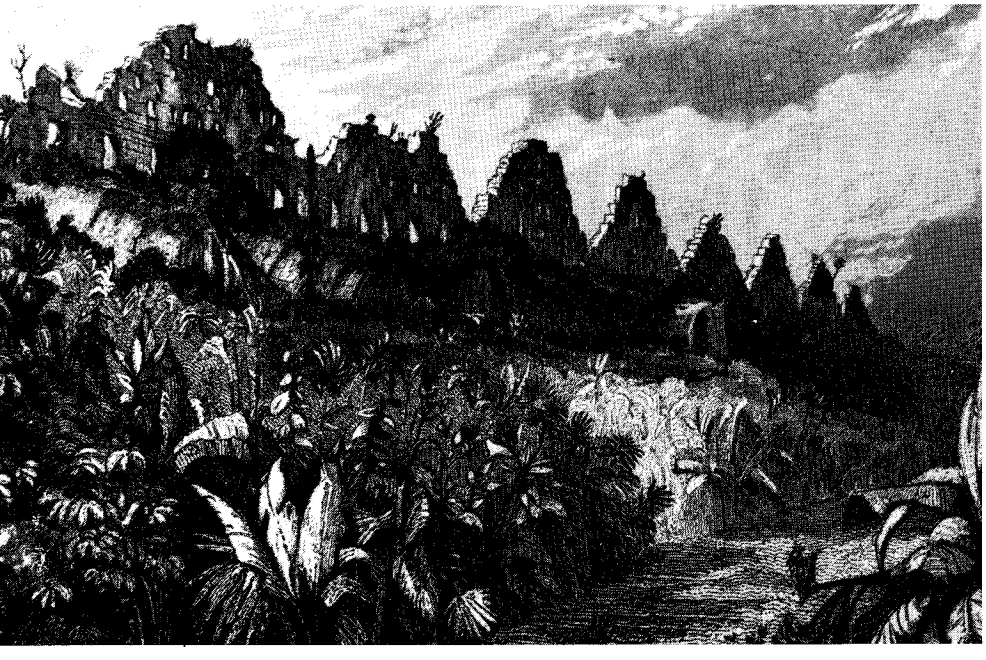
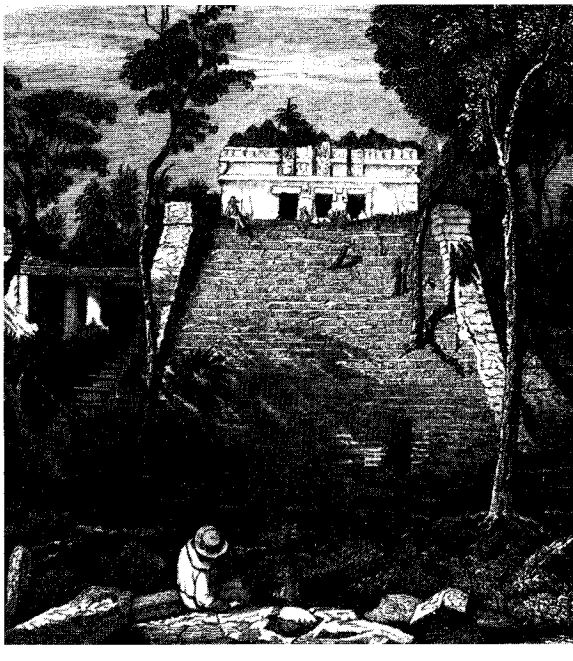
16世紀のスペイン人は，古代アメリカの伝説から何を学んだのであろうか。海のかなたの地が新世界の民の先祖の故郷であると告げている伝説は，スペインのユカタン征服時まで何世紀もの間語り継がれてきた資料として，最も信頼できるもののひとつである。

コロンビア時代前の様々な伝説には，大洋を渡ってきた移民に関するものが多い。スペインの征服を受ける以前，初めてコルテスに会見したモンテスマは，アステカ族の起源に関する疑問を提起し，スペイン人とアステカ族の関係の重要性を説いたと言われている。その模様は，コルテスがカルロス5世に宛てた2度目の書簡の中にモンテスマの言葉として次のように記録されている。

「我々の先祖の告げるところによると，我々ははるかかなたの土地からやって来た移住者です。また，先祖が忠誠を誓った主によってこの地に導かれたことを，我々は知っています。後に

モンテスマと会見するコルテス。スペイン人は，アメリカ大陸およびアステカ族に関する知識は皆無であった。アステカ族の伝説によると，この部族は，偉大な王に導かれてアメリカ大陸にやって来たと言う。



この御方は故国にお帰りになりました。……我々は，いつの日かその子孫がやって来てこの地を治めるようになると信じてきました。あなたが日の出ずる国から来られた御方であり，また偉大なる主があなたをこの地に送られたという話から，その御方がまさしく主であることを我々は確信しています。」（エルナン・コルテス，*Cartas y documentos*「書簡と文献」p.59）

モンテスマの言葉は，長年にわたってインディアンの過去に関する資料を収集してきた数人のカトリックの神父により立証されている。スペインの宣教師であり著作家でもあったランダ，デュラン，サーグン，トルキマダの4人は，無償で一生懸命に探求を続けた。しかし，当時彼らの働きについて知る人はほとんどなかった。そのような中でただひとつフアン・デ・トルキマダが執筆した *Manarquia Indiana*（「インディアナス王国史」）のみが，彼の生前に出版されている（1615年）。

フランシスコ派の神父であったフアンは，トトナコ語を学んだ後，原住民に関する情報の収集を始めた。彼は主に原住民の古文書，特にテスココの文書に収められたメキシコの歴史に基づいて書物を著し，民俗学的資料について直接証を述べている。

もうひとり，フランシスコ派の神父ベルナルジノ・デ・サーグンは，60年の年月を費やしてアステカ文化に関する資料を収集し，12冊の書物を著した。彼は幾つかの原地語を学んだばかりでなく，大勢の物知りのインディアンに，古代の絵文字の解釈を依頼している。

サーグンは，船で大洋を渡ってメキシコに上陸した集団がふたつあると語っている。そのひとつの集団ウアステカについては，次のように記している。「船で大洋を渡り，……メヒコと呼ばれる地に到着して，定住した人々。」（ベルナルジノ・デ・サーグン，*General History of the Things of New Spain*「新スペイン概史」第10巻，p.185）

もうひとつの集団メヒカについての記述を見てみよう。「はるか昔に，最初にこの地にやって来た人々，……この地を治めるために船で海を渡って来た彼らは，方々に入植した。」（同上p.190）トルキマダとサーグンの記述は基本的な点では類似しているが，細かい点に多少の違いも見られる。しかしいずれにしても，これまでに挙げた3つの引用文から，大洋を渡ってアメリカ大陸に到来した人々に関する貴重な情報が得られることは確かである。

ベルナルジノ神父はまた，古代のトトナコ族に関する記述の中で昔の白人

種について次のように言及している。「男も女も皆，白いはだをして，目鼻だちが整い，容姿端麗である。」（同上，第3巻，p.202）

コロンビア時代前の白人に関する話は，南アメリカにもある。ボリビアのティアウアナコ近くに住むコジャインディアンは，シエサ（スペインの歴史学者，1518—60年）に，インカ帝国の興国前にこの地方に住んでいたあごひげをはやした白人たちが，ふたりの王のひとりと戦いを起こして全滅した，という話を語ったという。「チチカカ湖に行ったコジャインディアンのひとりがその湖の最も大きい島で，あごひげをはやした白人たちが王に皆殺しにされるのを目撃した。」（ペドロ・デ・シエサ・デ・レオン，*The Incas.*「インカ」p.273）

またシエサは，ティアウアナコから北西に800キロほど行った所にあるペルーのウアリと呼ばれる地の遺跡を調べ，その文明がインカ文明とは別個のものであるという結論を出した。その文明を築いた人々について地元のインディアンに尋ねたところ，インカ人よりもずっと以前にそこに住んでいたあごひげをはやした白人たち，と言う答えが返ってきたからである。（同上 p. 123）

1572年にユカタン一帯を管理する司教となったディエゴ・デ・ランダは，マヤの書物を収めた書庫を公然と焼き払ったことで最もよく知られている。しかし一方で，古代のマヤ族に関する重要な記述を残している。その中にはマヤ族の先祖に関するユカタンの興味深い伝説についての記録もある。

「ユカタンに住む一部の老人の話によると，この地にはかつて，神のみ手により大海が開かれてできた12の道を通って東方から逃れてきた人々が住んでいたという先祖伝来の言伝えがあるという。これが事実であるとすれば，インド諸島の住民はすべてまぎれもなくユダヤ人の子孫ということになる。」（アルフレッド・M・トッザー，*Landa's Ralacion de las Casas de Yucatan*「ユカタン誌」第18巻，pp.16—17）

ランダは，この話が正しければ，マヤ族の先祖はユダヤ人である，と結論づけている。それは，その話がエジプトからのイスラエルの脱出に似ていると考えたためであった。また，もうひとりの神父ディエゴ・デュランは，旧約聖書に登場するヘブライ人とアメリカ大陸の原住民との類似点を書き残している。遠い昔のインディアンの複雑な起源にメスを入れたデュランは，ヘブライ文化とアステカ文化の間に，多くの類似点があることを発見した。以下にその幾つかを紹介しよう。

まず，創造とバベルの塔に関する話が，両方の文化で同じように語り伝えられている。（ディエゴ・デュラン，*Aztecs: The History of the Indies of New Spain*「アステカ：新スペインのインディアンの歴史」pp.4—5。創世1，11：1—9参照）

またヘブライ人もアステカ族も「神の選民であり，荒野における厳しい長旅を耐え抜いて各々の約束の地であるカナンおよびメキシコの谷に到達した。」（ディエゴ・デュラン，*Book of the Gods and Rites*「神々と儀式の書」。民数14：33—34参照）

またアステカ族は，イスラエルの民を安住の地へ導いたモーセに似た人物に関する話を次のように伝えている。

「インディアンの間には，多くの人々を集めて迫害から逃れるように彼らを説得し，彼らを安住の地へ導いた偉人に関する言伝えがある。……彼が海辺に行って，手に持っていたつえで海の水を動かすと，海が開けて，彼とその一行は海を渡ることができた。ところがこれを見た敵が彼らの後を追って同様に海を渡ろうとすると，水が戻り，敵は海のもくずと消えてしまった。」

デュランはまた，このふたつの民族にそれぞれ伝わっている重大な挿話についても記録している。

「彼らがある丘で野宿をしていると，恐ろしい地震が起こって大地が裂け，悪人がその裂け目にのみ込まれた。これを見た他の人々は，恐怖に震え上がったという。この出来事を描いた絵画を目にした私は，民数記の一節を思い出した。大地がその口を開けて，コラやダタンやアビロンをのみ込んだというあの話を。」

さらにアステカ族はヘブル人と同様，荒野における長旅の最中に天からマナを与えられた，と伝えている。（デュラン，*Aztecs*「アステカ」p.4。創世14：1—30；民数16：1—34；出エジプト．16：4—15参照）

アステカ族の青年は，旧約の時代のレビ族と同じような儀式を神殿の中で行なっていた。両文化とも，ある血統の一族が祭司の職を世襲し，食物を神への捧げ物として献じていたことはその一例である。山ばとを捧げ物としていたヘブル人の儀式は，うずらを捧げたアステカ族のそれとよく似ている。またいずれの場合にも，祭司が鳥の頭部をもぎ取って，それを祭壇の傍らに投じ，血を祭壇の周囲にまき散らしている。ヘブル人が犠牲として捧げた動物は，一点の傷があることも許されなかった。（デュラン「神々と儀式の書」p.85，104，124，131—33。申命18：1—12；民数15：1—24；レビ1：14—17；22：19—20；詩篇106：37—38参照）

これまでに挙げた事柄やそのほかに目を見張るような類似点が非常に多く，偶然の一致として片付けられないものがあることから，デュランは，アステカ族がイスラエルにその起源を持つと確信したのである。

これらの伝説はいずれも，単独で確証を与えることはできないかも知れない。しかし両文化の伝説が相まってひとつの状況を見事に描き出し，古代に中東から大洋を越えてアメリカ大陸に渡って行った民族の一大絵巻を繰り広げているのである。

フランクリン・S・ハリスIII　ラテンアメリカ史の博士号を修得。アメリカン・エアラインのパイロットとして働いており，テキサス州フォートワーススステーキ部アーリントンワード部日曜学校会長を務めている。

「持ってきなよ，読んでみるから」

マージョリー・A・マコーミック

1925年5月のある日のことでした。英国のロンドンにある鉄工所で，男たちがコークス炉を囲んでサンドイッチをぱくついていました。すると入社したばかりのジャックが立ち上がって，「僕はカナダに何年もいたがこんなにひどい言葉や汚ない話を聞いたことは一度だってないよ！」と言いました。

するとひとりが，「お前さん，今までどんな仲間と働いたんだえ」と聞きました。

「ほとんどがモルモンだ」とジャックは答えました。「住んでた家のおばさんもモルモンだった。教会からはとっても遠かったので，僕は一度も教会へ行ったことはないが，教会の人たちはみな立派な生活をしていたことは知っていた。酒は飲まないし，タバコはすわないし，人の悪口も言わない。」

私の夫が言いました。「そいつはいい！」 するとジャックは，自分の家にあるパンフレットを読んでみてはどうかと言いました。何でも言われると断われない性分の夫は，「持ってきなよ，読んでみるから」と返事をしました。

その翌日，ジャックは夫に5冊のパンフレットを渡しました。1冊はアメリカインディアンについて，1冊は「生ける光」という題，もう1冊は「親しく語り合おう」というパンフレットでした。そのほかのは覚えていませんが，夫がそれを家に持ち帰ると，私は本当にむさぼるように読みました。夫も熱心に読みました。

私たち夫婦の母はどちらもとても信仰心の篤い人でした。私は英国国教会，夫は原始メソジスト教会の家庭で育ちました。でも夫は幾つか違った教会に行ってみて，どこも信じませんでした。私も，教師や牧師さんの目からみればとても変わった子供でした。いつも，答えられないような質問ばかりしていたのです。今にして思えば，ふたりとも，福音を聞く用意をしていたのだと思います。私の母は何も知らないままに，知恵の言葉に添って私を育てました。

ジャックと私の夫は半年の間，土曜日ごとに，モルモン教会を捜してロンドン中を歩きました。でも教会は見つかりませんでした。そこで私も仲間に入りました。モルモン経を読んで，アメリカインディアンの由来を知りたい気持ちがしきりにしたからです。私は机に向かって，1冊のパンフレットに記されていたカナダ，オンタリオ郡トロントのファンデール通りに住むブリガム・H・ロバーツという人に手紙を書きました。その人しか手がかりがなかったのです。

その朝はどしゃぶりだったので，牛乳配達の人に通りの向こうのポストに手紙の投函を頼んで，私は2階へ上がってベッドを整え始めました。すると突然恐ろしい気持ちに駆られ，自分は間違ったことをしたのではないかと思いました。そこでベッドのわきにひざまずいて祈りました。そのような祈りをしたのは生まれて初めてでした。私はあのような手紙を書いて悪かったのならお赦し下さい。でも，もし返事が来たら自分が真実の教会を知ったと思ってすぐに教会に入ります，と主に約束しました。

2カ月が過ぎて，私はトロントの伝道部秘書から1通の手紙を受け取りました。手紙には，タルメージ伝道部長に伝えたので，彼から一番近い教会が紹介され，モルモン経が買えるでしょうとありました。そのときの喜びを御想像下さい。夫が帰宅すると私はさっそく飛んで行って，この吉報を伝えました。

次の日，タルメージ伝道部長から待ちに待った手紙が届きました。その手紙は今も覚えの書に張ってあります。当時，教会はロンドンの北部郊外にあって，私たちの家は西の郊外だったので，トテナムにあるロンドンの教会本部まではかなりありました。

翌日は土曜日だったので，ジャックと夫は朝早く好天気の中を，教会捜しに出かけて行きました。ふたりは目ざす建物を見つけると，夫はタバコをふかし，ジャックはパイプをくわえたまま，そこに入って行きます。するとそこで会ったアンドレ・K・アナスタシオン兄弟から，モルモンの信条に反するので建物内ではタバコを吸わないで下さいと言われました。

夫はモルモン経を2冊買いました。それは一冊だと私に独占されて自分が読めないことを承知していたからでした。ふたりは少しの時間アナスタシオン兄弟と福音に関する話をし，そのときに日曜日の集会の時間を教わりました。

私は本当に一生懸命にモルモン経を読みました。というのは，素晴らしい出来事があったからです。

その夜早速，ふたりで子供たちを寝かせつけてから，暖炉の両側にそれぞれ陣取ってモルモン経を読み始めると，私が1章も読み終えないうちに，部屋中が光で明かるくなったのです。本当に，自分も光で包まれたような気持ちになり，読み進むことができませんでした。私は，その素晴らしい本は真実ですと，聖霊が証しているのだと思いました。それがどれ位の時間だったかわかりません。時間など，私には止まっているようでした。やがて光が薄れて行き，私は自分の愛する書物を取り上げて，先へ読み進みました。私たちがバプテスマを受けたのはそれから丁度3週間後でした。

この本の力

リンダ・L・ステートン

最近の証会である兄弟が，「僕は教会員の家庭に生まれていなくても，この教会に入ったでしょうか」と言っていました。

私は心の中でこう返事しました。「ええ，あなたは入るわ！　モルモン経が目の前にあれば，必ず開いて読みたくなるわ。そして読んでみれば，疑いは消えて，信仰が胸に満ちることよ！」

私たち夫妻はイリノイ州の小さな町で育ちました。学校が同じでしたし，同じプロテスタントの教会に通っていました。でも，子供とはいえ，私は両親の信仰について行けませんでした。教会を休んで家にいたいと頼んでは，よく留守番をしていました。両親は幼児のバプテスマを信じなかったので，私はバプテスマを受けていませんでした。私は時々日曜学校へ行ったり若い人々の集会に出たりしましたが，いつも満足できませんでした。

もっと大きくなってからは，ボーイフレンドに勧められて彼の教会に行き，夏休みの間聖書研究の手伝いをしたこともあります。でも，牧師さんと信仰について話をした結果，その教会にも自分は入れないと感じました。私はよく主にこうお祈りしました。「どうしてあなたの教会に満足できないのでしょうか。あなたの礼拝の家に行ってもみたまが感じられないのです。私はどこがいけないのでしょうか。バプテスマが受けられないと思うのはどうしてでしょうか。」何の答えもなく，ジレンマに耐えきれなくなりそうなこともたびたびでした。これといったキリスト教の信仰が持てないことに，罪の意識も感じました。

私は19歳でマイクと結婚し，それ以来，ぷっつりと教会には行かなくなりました。そしてクリスが4歳，クリスタルが2歳のときに，子供に宗教教育を施すのは親の責任だと感じて，近所の教会に通い始めたのです。子供たちはとても喜びましたが，私は打ち解けませんでした。教会は愛も暖かさも感じられず，私は教会の教えを学ぶにつれて，ここが私たち家族の来るべき場所だろうかとまた迷い始めたのです。それから2年して，私たちは教会通いをやめました。子供たちからどうして教会に行かないのと聞かれましたが，私は何も答えませんでした。

罪の意識から別の教会に連れて行ったりもしましたが，自分はとても入れないと感じて，子供たちをドアの所に置いたまま，自分は帰ってきました。そうしたある日曜日の朝，いつものように子供たちを連れて行くと，自分は悪いことをしているという気持ちに駆られ，もう二度と行かせられないと思いました。私は主に，何が悪いのか尋ねました。しかしそのときも，答えがありませんでした。

その夏はずっと，日曜日ごとに子供たちを野山に連れ出して，天父がお造りになった美しい世界を見せ，ラジオの讃美歌を一緒に聴きました。けれども，これで良いという気持ちにはなれませんでした。夫は私ほどに宗教心はなかったのですが，休暇になったら，私たちの結婚した教会へ子供たちを連れて行ってバプテスマを受けさせることを承知してくれました。ところがいざ休暇になると，ミシガン州へ行く代わりにイリノイ州西部に足が向き，そこでノーブーを訪ねて，若い宣教師の車で町めぐりをしたのです。彼が福音を愛していることは，その顔やほほえみから十分にうかがい知ることができました。

私たちは訪問者センターでカードに名前を書いて宣教師の訪問を依頼し，夫はひとりの女性の方から，内側に証が印刷してあるカバーをかけたモルモン経をいただきました。私たちは暖かい気持ちを感じて外に出ました。

車のシートの上に置かれたその素晴らしい本は，私の目を引きつけて離しませんでした。私は本を取り上げ，暗くなって字が見えなくなるまで読み続けました。その日から，私はその本を手離せなくなりました。そこに記されている知識に飢え渇いていたのです。私は何度も夫に部分部分を読み聞かせ，その本に書いてある答えにふたりで目を見張りました。2ヵ月のうちに私は本を読み終え，書かれてある教えを信じました。

私たちは宣教師と一緒に福音を勉強して，間もなくバプテスマを受けました。私は子供日曜学校の教師の召しを与えられましたが，しかしその責任を果たせる自信はありませんでした。自分に教師や指導者の資格があるとは思えなかったのです。けれども天父の助けで自信を持つことができ，今では召しを心から楽しんでいます。素晴らしい経験をしたことにより，いつも主の導きを身近に感じることができるようになりました。

翌週のレッスンの準備を終えて床に入った夜のことです。翌朝早く目ざめて，レッスンの準備がまだ完全でないと感じました。何をすればよいかわかっていたのですが，それがレッスンに必要だという理由がはっきりわからなかったのです。私はまだそのことをお祈りしていませんでした。けれども，これは助けがいつも近くにあることを教えてくれる経験ですとみたまがささやいたとき，私の心に暖かい安らかな気持ちが感じられました。準備した以上の助けがあって，その翌週はこの上なく充実したレッスンができました。

今，私は自分たちが見守られていることを確かに知っています。過去に耐え難く感じられる生活も時々ありましたが，主がある時期に私たちを主のまことの教会に導こうとして私たちを見守っていて下さったことを，私は感じています。私たちはとても幸福です。そして今，私たちは再び主のみ前に戻るために，福音の原則を守らなくてはいけないのです。

アメリカの聖書はどこ

ジュディス・T・ロイズ

アメリカに昔住んでいた民族に宗教に関する記録があったはずだと考えるようになったのは一体いつの頃からか，はっきり思い出せません。とにかく，何年間も宗教の研究を続けたある日，そんな信念がかたまっていたのです。

私は子供の時からプロテスタントの教会に通っていましたが，十代になってから，それまで勉強してきた恨み深い憎悪の神という考え方に反感を持つようになり，真理を知りたいということで，聖典をもとに自分で5年間の勉強を始めました。聖書を研究すれば真実の教会がどういうものかはっきりわかると思ったのです。

「真実の教会にはどんな特徴があるはずだろうか」というむずかしい疑問に，何か答えが見つかるかもしれないと考えて，図書館の本を調べたりもしました。これは非常な難問で，見つかった答えはどれも決定的な解答を与えるものではありませんでした。でも，真実の教会を見分けることができるように，そのような断片的な答えをまとめておくことが大切に思われました。私は科学や歴史や宗教や超自然に興味を持つ人たちを捜して，話をしました。

そのうちどうしたきっかけか，古代文明に好奇心をそそられ，エジプトやアメリカのピラミッドに心を引かれました。マヤ人はどのようにして暦を発明したのだろうか。インカ帝国はどこから興ったのだろうか。アメリカに最初に上陸したのは本当にコロンブスだったのだろうか。旧大陸と新大陸に数々の共通点が見られることはたくさんの証拠が物語る通りでした。

私は昔の歴史書や宗教書を読んで，キリストはユダヤ人だけでなく，ほかの民族にも姿を現わされたに違いないと思うようになりました。また，とてもおかしなことなのですが，私が心を引かれたのは古代のアメリカに住んだ民でした。私は次第に——もっと良い呼び名があればよいのですが——「南アメリカの聖書」が必ずあるに違いないと思うようになりました。

でも，南アメリカに住んでいた昔の民の記録はありませんでした。スペイン人に征服されたときに，そのほとんどが焼かれてしまったからです。私はインカ人がピツァロを西から来るはずの大白神と思い込んで歓迎したことに興味を持ちました。

5年間の研究を終えようとする頃，いろいろな本を読んだ結果として，私は真実の教会がどういう教会か，その特徴をあげたリストを完成しました。第一にその教会は父なる神が愛の神であると教えていること，次に聖霊が信仰と密接に関わっていること，その教会は病気の人や悩んでいる人をいやすことができること，死後の存在を信じていること，予言の賜のあること，黙示録を論理的に説明できること，失われた10支族を信じ，その集合を待っていること，科学的真理と宗教上の真理がお互いに補足し合うこと，別の星にも生命が存在することを信じていること。真実の教会の特徴はまだまだありましたが，ここに全部はあげません。

この頃になると，時代の経過と共に聖書の中の多くの真理が失われてしまったと確信するようになりました。そこでインカやマヤやアステカの文明に的をしぼることにしました。また，その文明の文字を解読さえできたならば，真実の宗教の鍵はそこにあると確信していたのです。私などより博識の学者たちが大勢過去何世紀にもわたって解読作業に取り組んできたというのに，この私がどうしてそれに挑戦しようと考えたのでしょうか。それでも私は，未解読の文字と古代文字の文献を1冊ずつ買ってきて，エジプト象形文字の勉強を始めました。この頃から，主が私を心に掛けて下さったのだと思います。

私が研究を重ね，「真実の教会」の特徴と思われる事柄を書き出していた傍ら，ひとりの親友にそれを話して聞かせるようになりました。私が彼女に「自分」の教会の特徴を話すと，彼女はいつも，「まあ，それはモルモンが信じていることじゃない」とか，「モルモンの教えに似ているわね」と言うのです。どういうわけか，私はそれまでいろいろ研究していながら，モルモンの教えに接したことが一度もありませんでした。その数週間後，私は彼女から「教義と聖約」を貸してもらいました。その本をひと晩で読み終えて，次にジェームズ・E・タルメージ長老の「信仰箇条の研究」に進みました。それから，末日聖徒イエス・キリスト教会に電話をして，宣教師の訪問を依頼しました。

宣教師の教えは耳新しいことではありませんでした。自分で何年も研究してきて，それらのことをそっくり信じていたからです。バプテスマの面接をして下さった巡回宣教師がニーファイ第三書17章の終りの，キリストが幼な子たちを祝福される義しい聖句を読んだとき，私の目には涙があふれました。そして，私はのどをつまらせながら，「はい，存じています。キリストがアメリカ大陸にいらっしゃったことは，よく存じています！」と言いました。

私は昔の「アメリカの聖書」をとうとう発見したのです。

シオンの建設

十二使徒評議員会会員
ブルース・R・マッコンキー

私たちはこの南米の教会で行なわれている非常に素晴らしいみ業を言葉ではとうてい言い尽くせないほどに感謝している。十二使徒会地区代表，ステーキ部長，監督，ならびにステーキ部やワード部で責任を持って働く立派な方々に，心からの賛辞を呈したい。私たちは，ここに大いなる発展と成長の基礎が据えられたと感じている。南米諸国に教会が多大の影響を及ぼす日を，今から予見している。シオンのステーキ部がこの地に組織されたことは大きな喜びである。私たちは，これらのステーキ部が数，質ともに発展することを願っている。

私は今日，末日におけるイスラエルの集合とシオンの建設についてお話するつもりである。御存知のように主は戒めを破って主を捨て去ったイスラエルを，地上の万国の中に散らされた。そして現在，主はそのイスラエルの失われた羊を呼び集め，彼らに末日のシオンを建設する責任を負わせておられる。

この末日におけるイスラエルの集合とシオンの建設は，今まさに進行中である。この大事業の序幕は，合衆国への集合と北米におけるシオンのステーキ部の建設をもって，すでに完遂された。そして今私たちは，世界各国におけるイスラエルの集合と，地の果てにシオンのステーキ部を確立する仕事に従事している。これが，現在南米諸国で進められているみ業であり，私がこれからお話しようと思っていることである。

今から3千年の昔，主はひとりの予言者の口を通して，私たちにみ教えを伝えられた。この古えの聖人は聖霊に促されるままにこう語った。「きたるべき代のために，この事を書きしるしましょう。そうすれば新しく造られる民は，主をほめたたえるでしょう。」（詩篇102：18）

私たちはその民である。再び啓示を受けている民，神が新たに完全な永遠の福音を授けられた民，そのため，私たちは主の聖なるみ名をとこしえにほめたたえる。

私たちに伝えられた言葉は，主が「立ってシオンをあわれまれるでしょう。これはシオンを恵まれる時であり，定まった時が来たからです」，「主はシオンを築き，その栄えをもって現れ」（詩篇102：13—16）という知らせである。

ここで，みたまの力に導かれるならば——これは私の切なる願いであるが——私は主がシオンを建設されるさまを，主がシオンをあわれまれるさまを，また私たちがシオン建設において期待されている役割をお話したいと思う。

シオンの建設

霊感によって記された記録から明らかなように，シオンは築かれる。主が栄光をもって現われるときに，シオンは完成され，栄光はシオンのものとなる。そのとき，シオンはかつての姿を取り戻す。万物の回復が完了する福千年の間，その状態が続く。シオンはキリストの再臨後に完全な姿となる。

しかし一方で——現在がそうだが——主は私たちに来たるべきことの基礎を据える責任を課しておられる。私たちには，人の子の再臨に対して民に備えをさせる責任が与えられている。私たちはすべての国民，血族，国語の民，人々に福音を宣べ伝えるように召されている。栄光のうちに座して聖なる市を再び治める御方の再臨に備えて，シオンの基礎を置き，すべてのことを準備するように命じられている。私たちは，「シオンに来たれよ，喜びに入れ」（「悩めるイスラエル」讃美歌103番）とあらゆる民に呼びかけるのである。

シオンとは

ではシオンとは何か。どこに築かれるのか。なぜシオンの壁を建てるのか。どこにシオンの門とシオンの堅固な塔を置くのか。シオンの門に住むのはだれか。シオンの住民にはどんな恵みが注がれるのか。

聖書は実に語っている。「主はヤコブのすべてのすまいにまさって，シオンのもろもろの門を愛される。神の都よ，あなたについて，もろもろの光栄ある事が語られる。……しかしシオンについては『この者も，かの者もその中に生れた』と言われる。いと高き者みずからシオンを堅く立てられるからである。」（詩篇87：2—3，5）

シオンは民の間に幾度も築かれてきた。アダムの時代から現在まで，主が御自身の民を持たれたとき，また主のみ声を聞き，主の戒めを守る民があるとき，そして聖徒たちが真心から主に仕えたときに，必ずシオンは存在した。

聖典のシオンに関する最初の記述は，エノクとその市についてである。卓越した信仰と力とを持つこの予言者は，父祖アダムがまだこの世に生きていた時代の人である。その時代は悪事と罪悪の世，反逆と邪悪の世，戦いと荒廃の世，水による地球の清めに向かいつつある時代であった。

しかし，エノクは忠実であった。彼は「主を見」，人が人と語るように主と「顔と顔を」相合わせて語った。主は彼を世に遣わして悔い改めを叫ばせ，「父と恩恵と真理に充てる子と，父と子を証する聖霊の御名によりて，バプテスマを施せよ」と命じられた。エノクは誓約し，真理に従う信者たちを集めたが，その民はみな信仰篤く，「主来たりてその民と共に住みたまいたれば，彼ら正義の中に住み」，上からの恵みを豊かに受けた。「主，その民をシオンと呼びたまえり。彼ら心を一にし，精神を一にし，義の住みたればなり。されば彼らの中に貧しき者一人もなかりき。」（モーセ7：18）

心に銘記していただきたい。シオンとは民のことである。シオンは神の聖徒たちである。シオンはバプテスマを受けた人々，聖霊を受けた人々，戒めを守る人々のことであり，義人たちのことである。言い換えれば，啓示が告げるように，「これこそシオン，すなわち『心の清き者』なればなり。」（教義と聖約97：21）

エノクの市

主が主の民をシオンと呼ばれてから，聖典には，エノクが「一つの市を建て，それを聖なる市すなわちシオンと呼

べり」，また，「神これをとり挙げて，自らの懐に受入れたまいしが故なり。これよりして『シオン逃げたり』と言う言葉世に出できたれり」（モーセ7：69）と記されている。

主の民が移され，天に取り上げられたのは，レンガやモルタルの家ではなく，石の壁でもなく，民であった。それは地上の建物よりもずっと立派な住まいが天に用意してあったからである。また，これらの義しい聖徒たちが幕のかなたに去った後にも，改宗して正義を願った人々が，神によって造られ基礎の置かれたその市をあこがれ，「天の力により捉えられてシオンに入れり。」

天に取り上げられたそのシオンは，主が再びシオンを伴って来られる福千年の時代にこの世に戻ってくるであろう。そしてシオンの民はやがて建てられる新エルサレムに合流するであろう。（モーセ7：4—69参照）

イスラエルの集合

シオンに関するこれらの真理の多くが古代のイスラエルで知られ，教えられていたことは，イザヤ書や詩篇その他数々の記録から明らかである。イザヤは特に，回復の時代に築かれるシオンのステーキ部について述べた。

よく知られている通り，古代イスラエルの民は，主を捨てて偽りの神々を拝んだため，万国の民の間に散らされた。またこれも知られている通り，イスラエルの集合とは，真理を受け入れ，贖い主を再び正しく知り，良い羊飼いのまことの群れに戻ることである。モルモン経の言葉によれば，それは「神の真の教会と羊の群に再び復（かえ）され」，「集められ」，方々の「約束の地に住む」ことである。（IIニーファイ9：2参照）

イスラエルの集合によって，ふたつのことが成就される。ひとつは，そうしてキリストを自分の羊飼いとして選んだ人，バプテスマの水の中でキリストのみ名を受けた人，この世ではみたまを享受し，来たるべき世では永遠の生命を受け継ぎたいと願う人，そのような人々は，互いに強め合い，完全を目ざして助け合うために，集合する必要があるということである。

そしてふたつには，永遠に最高の報いを求める人々は，自分のためにも，また機会さえあれば真心から受け入れていたはずでありながら福音を知らないまま死んで行ったイスラエルの先祖たちのためにも，主の家の祝福を受けられる場所にいる必要があるということである。

この神権時代の初期においては，このことが北米の山の頂にある主の家の山への集合を意味したことは明らかである。そこだけが，互いに強め合うことのできる大勢の聖徒たちが集まった場所であったからである。そこにだけ，昇栄を受けるに必要な完全な儀式を行なう至高者の神殿があったからである。

全世界の教会

しかしながら，すべてのことを知っておられる御方，イスラエルを散らし，今再びその愛する民を集めておられる御方の摂理によって，キリストの羊の群れが地の果てにまで広がる時代が今や来ている。教会はまだすべての国に建てられてはいないが，人の子の再臨までに，必ずやあらゆる国に教会が建てられるであろう。

モルモン経が告げる通り，末の時代には「神の聖徒ら」が「全世界」に広く住み，全世界の上に散らされている「小羊の教会の聖徒ら」と「主の誓約を受けて……世界の各所にちりぢりとなった民」が「義と大きな栄光にかがやく神の能力とを以て武装」するであろう。（Iニーファイ14：12—14参照）

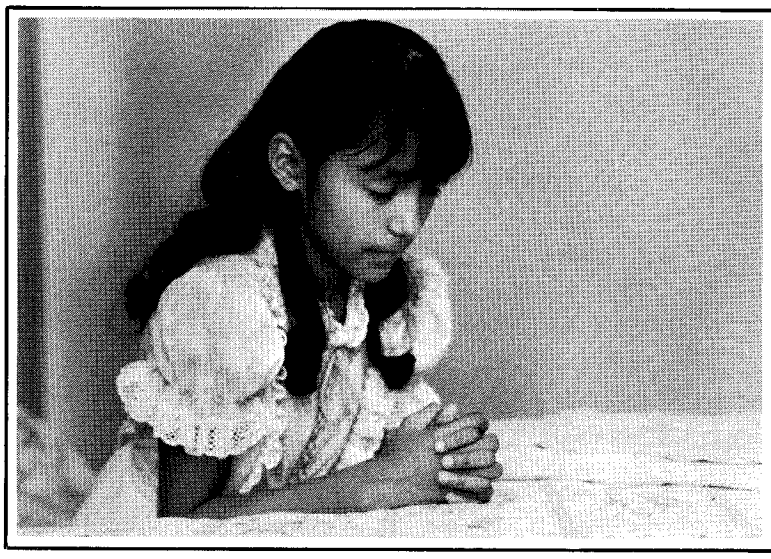
私たちは新しい時代にいる。末日聖徒イエス・キリスト教会は急速に世界の教会となりつつある。聖徒たちの群れは今も，あるいは近い将来にも，どこに住もうと教会員を支え助けるだけの力を備えるのである。必要な場所に神殿が建てられている。時が来ると南米にも数多くの神殿が建てられるのを，私たちは今予見することができる。

シオンのステーキ部

シオンのステーキ部も地の果てにまで組織されつつある。これに関連して，次の真理を考えてみようではないか。シオンのステーキ部はシオンの一部である。シオンの一部を作らずに，シオンのステーキ部を作ることはできない。シオンは「心の清い者」である。私たちはバプテスマと従順とによって清い心を得る。

ステーキ部は地理的な範囲を持つ。ステーキ部の創立は聖都の建設に似ている。地上のステーキ部はどれもみな，その地域に住むイスラエルの失われた羊たちの集合場所である。ペルー人の集合の地は，ペルーのシオンのステーキ部，もしくは将来ステーキ部となる場所である。

チリ人の集合の地はチリ，ボリビア人の集合の地はボリビア，韓国人の集合の地は韓国，東西南北，全世界を通じて集合の地はそのような場所である。各国に散らされたイスラエルはキリストの羊の群れに，各国に建てられるシオンのステーキ部に呼び集められている。



イザヤは，「後になれば，ヤコブは根をはり，イスラエルは芽を出して花咲き，その実を全世界に満たす」と予言している。そして主の約束はこうである。「イスラエルの人々よ……あなたがたは，ひとりびとり集められる。」（イザヤ27：6，12）

すなわち，イスラエルは一人一人，一家族一家族，地上の全地に築かれるシオンのステーキ部に集められ，やがて全地が福音の実によって祝福されるのである。

そのため，教会の指導者たちはこう勧告する。シオンを築きなさい。神があなたを置かれたその国に，シオンを建てなさい。あなたをその市民とし，家族と友を与えられた，その地にシオンを築きなさい。シオンは南米のこの地にある。この地のシオンに住む聖徒たちは，これらの諸国に良い影響を及ぼすのである。神は，み業の発展を促す政策を進める国を祝福されるであろう。

末日のシオン

主のみ業のひとつに，末日のシオンの建設がある。主はその業を私たちに託された。シオンの基は，北米，南米，欧州，アジア，南太平洋その他，シオンのステーキ部のある各地にすでに据えられている。しかしシオンは，これらのどの地域においてもまだ完全ではない。シオンが完全になるのは，それが古えのシオンと合流するときである。そのとき，主は来られてその民と共に住まわれるであろう。

教会の信仰箇条第10条には，「われらは，イスラエル人は，文字通りに四方より集合」することを信ず，とある。この集合は，イスラエルの失われた羊が教会に加わることで実現している。バプテスマの水によって洗われ，再び心の清い者となる力を得ることでこの集合が実現している。シオンとは「心の清い者」である。

信仰箇条にはまた，「われらは，……その十支族の元に立ちかえることを信ず」とある。これは将来のことである。主が約束に従ってシオンを再び建てられるときに，これが実現するであろう。

信仰箇条には，「シオン（新エルサレム）はこの（アメリカ）大陸に」建てられると言われている。これも将来のことである。主の民が，散らされた世界各国で力と影響力と能力を得てから起きることである。

教会の信仰箇条には，「キリストは御自ら地上に王となりて治めたまい，地球は元にあらたまりて楽園の栄えを受くることを信ず」とある。これもまた将来の，私たちが心から願い待ちわびているその日の出来事である。（信仰箇条第10条参照）

シオンの建設

私たちはだれでも，心の清い者になることによって，自分の生活にシオンを築くことができる。「心の清い人たちは，さいわいである，彼らは神を見るであろう」（マタイ5：8）という約束がある。そして，友人や隣人をイスラエルの羊の群れに集めることによってシオンの境界を広げることができるのである。

今話していることはみな，主の偉大な計画の一部である。主は初めから終りまでを知っておられる。現在行なわれている事業は主が定められたものである。主は選民を地上の万国に散らされた。そして今，この私たちの時代に主は恵みによって諸天を開き，み前から聖なる天使たちを遣わし，天から自らの声で語り，聖霊を注ぎ，そのようにして，主は再び完全な永遠の福音を回復されたのである。主は私たちを闇からキリストの驚くべき光へと引き出し，新たにシオンを建てよと命じ，世に打ち勝てと命じ，私たちにすべての悪しきことを捨てよと命じられた。主は私たちを主の代表者，主の代理人となし，出て行ってイスラエルの失われた羊を捜し出す務めを与えられた。私たちがその羊をまことの教会に集めて神の聖徒とすることを，主は願っておられる。

証

これは実に重大な業である。これに匹敵する事業は世にひとつとしてない。主イエス・キリストの福音は，天においても地においても最も大いなるものである。私たちは現在受けている天からの栄えある真理を喜びとしている。私たちは慈悲と恵みの主をほめたたえる。私たちは，これらのことが真実であり，神にその源のあることを知っている。

私は心に告げる聖霊の啓示によって，私たちが携わっているこの業が真実なものであることを知っている。主のみ手がその中にある。私たちの働きはやがて成功を収める。水が海をおおうように，神の知識が地をおおう日は来るのである。私たちはこの世で最も祝福された幸せな民である。神は私たちに知恵を授け，情熱と献身を恵み，私たちが福音に従って自分の命を救い，これらの栄えある救いの原則を神のほかの子らにも伝えるべく，主の用向きにいそしむ熱意と能力を恵まれた。これこそ，主のみ業であり，真実である。このことを，主イエス・キリストのみ名によって証申し上げる。アーメン。

質疑応答

教会翻訳配送部
アレン・E・リッター

これまでモルモン経は何ヵ国語に翻訳され，初版以来何部ほど出版されていますか。

モルモン経は1830年春にニューヨーク州パルマイラで初版の5千部が出版されて以来，現在まで27ヵ国語で出版されています。デゼレトアルファベットとウェールズ語，ハワイ語，トルコ語，チェック語，アルメニア語は絶版になりましたが，現在も印刷されているものとしては英語，デンマーク語，ドイツ語，フランス語，イタリア語，スペイン語，スウェーデン語，マオリ語，オランダ語，サモア語，タヒチ語，日本語，ポルトガル語，トンガ語，ノルウェー語，フィンランド語，ラロトンガ語，中国語，朝鮮語，南アフリカ公用オランダ語，タイ語，インドネシア語，それにブレール式点字です。

モルモン経が全世界に普及するにはまだまだですが，その出版には目をみはるものがあります。末日聖徒イエス・キリスト教会によって印刷配布されたモルモン経は1830年以来およそ1800万部を数え，1976年だけで100万部が22ヵ国語で出版されました。その他，復元イエス・キリスト教会もモルモン経を出版しています。

ちなみに聖書はその抜粋を合わせれば，すでに1550の言語で世に出ています。1975年中に，旧新約の合本は600万部以上，一部だけの聖書は3億部も出版されています。

分類や評価は様々ですが，現在，世界にはざっと3,500の言語があります。そしてそのうち，100万人以上に使用されている言語は114です。従って，現在モルモン経が翻訳出版されている22の言語では，世界人口の約4割に利用される勘定です。

モルモン経の翻訳は大変な仕事で，それこそ何年間もの忍耐と祈りの気持ちを込めた努力が要求されます。教義をはっきりと理解していなければならない上に，英語と自国語の両方の賜を持っていなければならず，さらに言語特有の問題にも出会います。例えば，英国などの言語の動詞は単複両形で用いますが，単数，二数，複数の形で表わす言語も幾つかあります。「ところが私ニーファイが兄たち(*brethren*)にこう言うと，兄たちは私に腹を立てて」(Iニーファイ7：16)という箇所を訳すようなときになると；ニーファイが言っているのはふたりなのか3人以上なのか，判断しなければならないわけです。ある言語では*brethren*が「弟」なのか「兄」なのかはっきりさせなければなりません。そのほかジェレドの兄弟がジェレドより年下か年上か，ある程度翻訳者の判断にかかってくることになります。教義と聖約121章43節には *betimes* という単語が使われていますが，大体の人はこの意味を「ときどき」と受け取っています。しかしよく調べてみれば，ジョセフ・スミスの時代には「そのときに」という意味だったことがわかります。モルモン経などの聖典の翻訳になぜ時間がかかるのか，また翻訳者と校閲者が十分にみたまの導きを受けなければならないのかが，以上の3つの例からもおわかりでしょう。

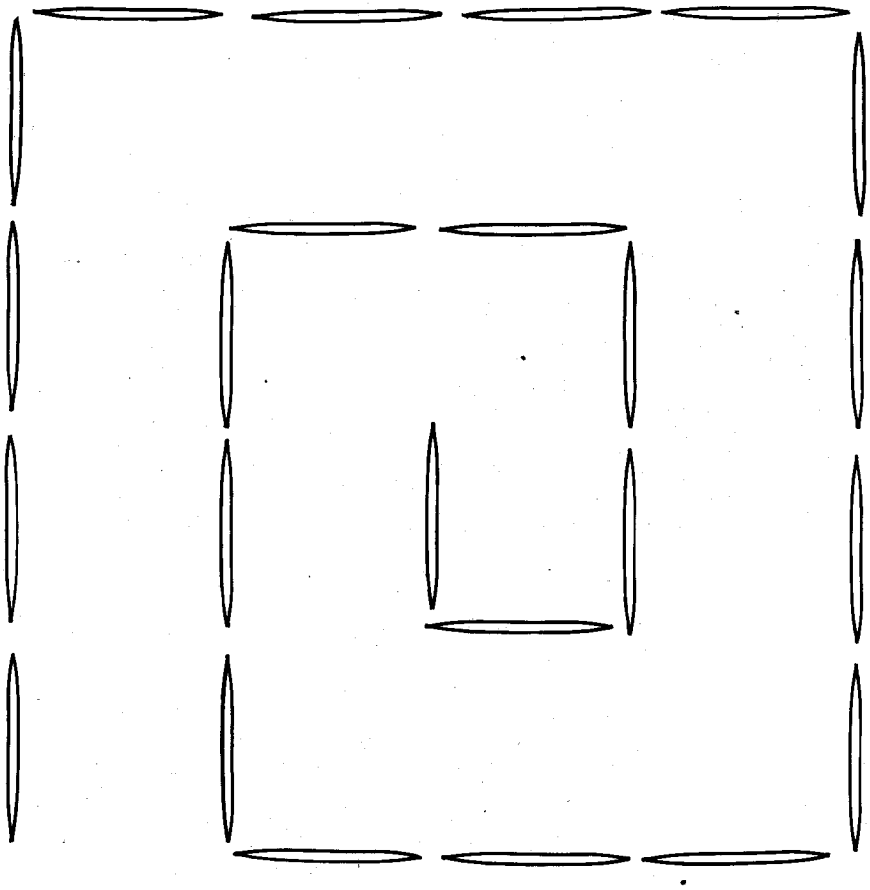
各国語のモルモン経が全部，教会の正規の翻訳者の手で翻訳されたわけではありません。モルモン経を自国語で読めるようにすることの必要性を痛感した教会員が，何年も自分の時間を捧げて翻訳し，その原稿を教会に寄付した例が幾つかあります。

2，3の言語ですが，末日聖徒でない人たちが翻訳したものもあります。しかし，その作業に主の霊感と導きがありました。例えば，南アフリカの公用オランダ語のモルモン経はその一例です。訳者は立派な人格者で，地元の指導者たちから太鼓判を押された人でした。彼はむずかしい文章に行きあたると，別の数ヵ国語のモルモン経をよく研究したと言っています。それでも納得の行く訳が見つからないと，最後の頼みの綱として，ひざまずいてその文章はどう訳したらよいか主に伺いました。そうすると必ず解決したそうです。

現在モルモン経を何語に翻訳中ですかとか，次はどの語にとりかかる予定ですかとよく聞かれます。それは大管長会と十二徒使定員会が決めることで，適当なときに適当な場所でその発表があります。しかしこのことははっきりしています。モルモン経には「イエス・キリストの完全なる福音」が載っていて（教義と聖約20：9），「また当教会の長老，祭司および教師たちは，……モルモン経に誌されたるわが福音の原則を教うべし。」（教義と聖約42：12）また，この末の時代には「あらゆる人々は己が国語と己が言葉にて完全なる福音を聞かん。」（教義と聖約90：11）主は御自身がこれと定める時期と方法で，あらゆる国語と言葉の民にこれらの約束を成就する道を備えておられるのです。

数々の国で大勢の人々がすでに様々な言語のモルモン経を読み，それが真実であるという強い証を得ています。熱心にモルモン経を読んで尋ね求める人々は，そのように証を受けることができるのです。

おもちゃばこ



ふしぎなつまようじ

かぞくのみんなに，24ほんずつつまようじをくばってください。それを左の絵のようにならべましょう。ようじを4ほんだけうごかして，ましかくを3つ作ってみましょう。さあだれが早くできるかな。できたら，こんどはお友だちとしてみましょう。こたえは，412ページにあります。

バイオレット・M・ロバーツ

なんにんかな

スミスさんの家には男の子と女の子がいます。マイクという男の子がいちばん下です。マイクのおねえさんの人ずうは，おにいさんの人ずうの2ばいです。また女の子は男の子よりひとり多くいます。さあ，この家にはいったい女の子と男の子がなん人ずついるでしょう。

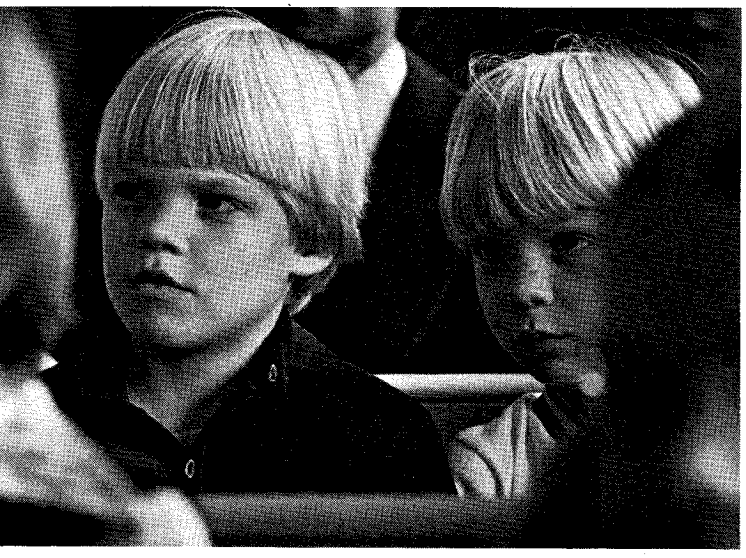
こたえ（女の子4人，男の子3人）

ぼくの色はなに色？

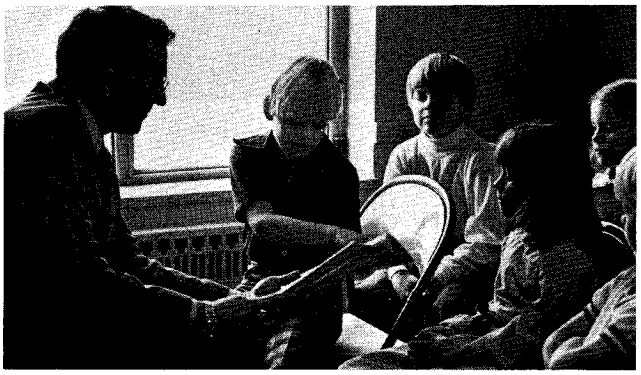
ぼくは，日本のとなりの中国という国で生まれました。くまのように見えますが，ぼくはねこの仲間です。ささの葉っぱが大好きです。もうわかったでしょう。それではぼくの色をあててください。

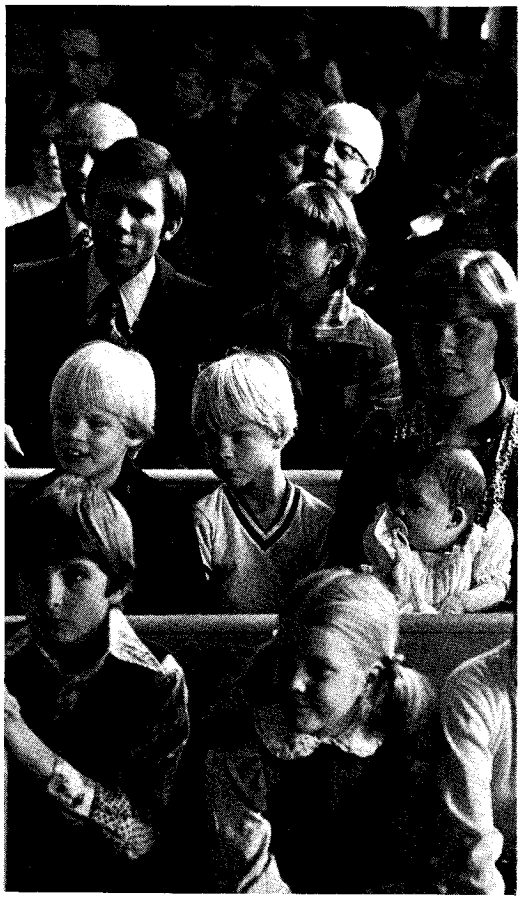
こたえ（黒と白）

コリーのバプテスマ



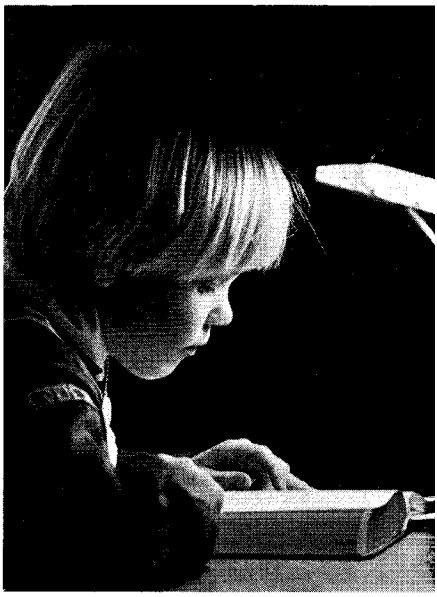
1 コリーはバプテスマのじゅんびをするために，日よう学校やプライマリーでべんきょうしています。





2

かぞくや友だちといっしょに，せいさん会にもしゅっせきします。



せいてんのべんきょうもたいせつです。

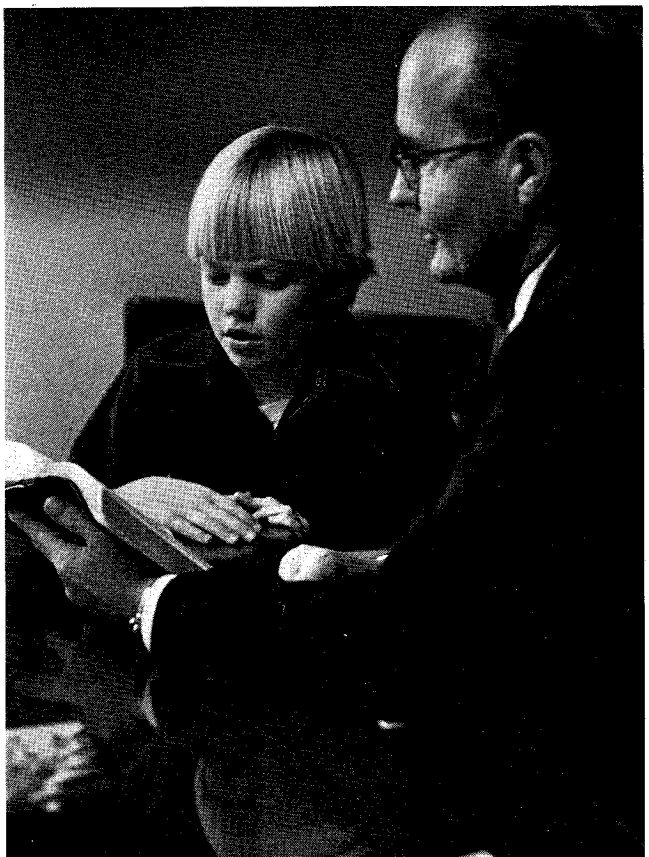
3

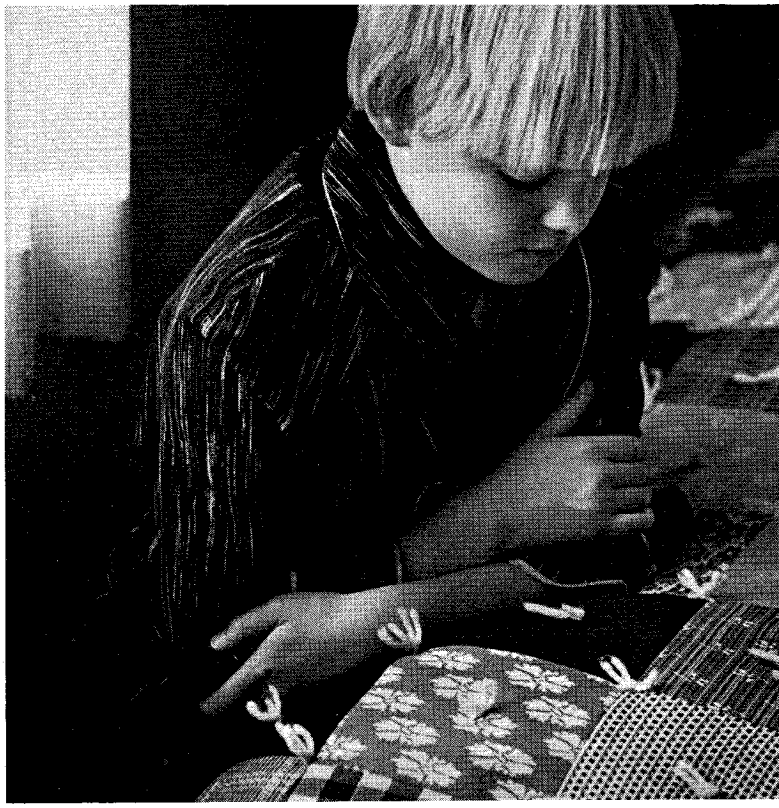
4 かていのゆうべで，
コリーの8さいのたんじょう日を
みんなでおいわいしました。

5 おとうさんとおかあさんとコリーの3人で，
8さいになったことのたいせつさと
バプテスマについて話しあいました。

コリーはかんとくに，バプテスマの
じゅんびをしていることと
バプテスマをうけたいと
思っていることを話しました。

6





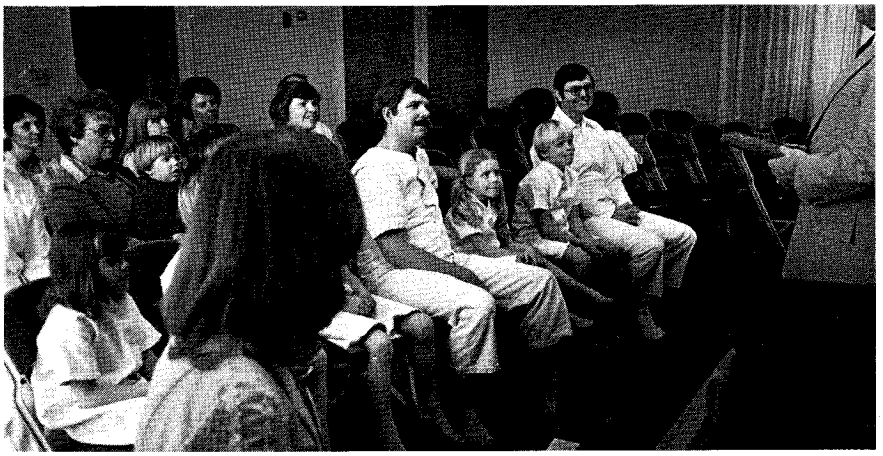
7 天のおとうさまにもバプテスマを
うけることを話しました。
そして土よう日のバプテスマが
よくできるように，おいのりしました。

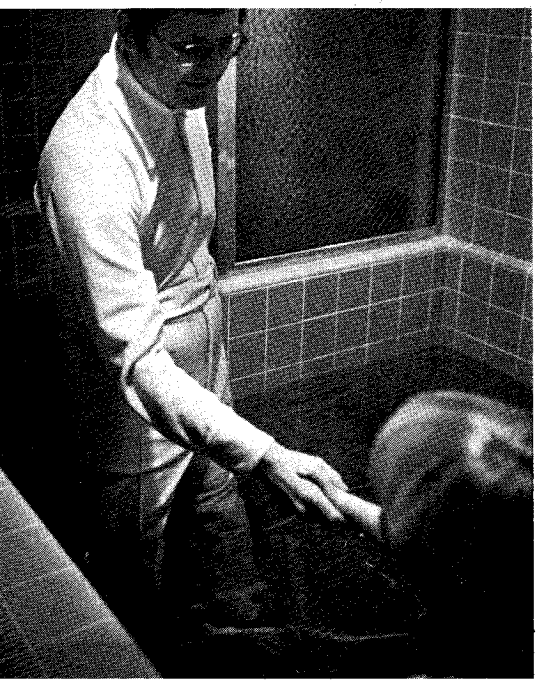
8

バプテスマの日になりました。
コリーはおとうさんのとなりに
すわりました。
いっしょにうける友だちもいます。
バプテスマをうけるときは
みんな白いふくをきます。

9

さんびかとおいのりが
おわったあと，バプテスマの
たいせつさについての
お話がありました。



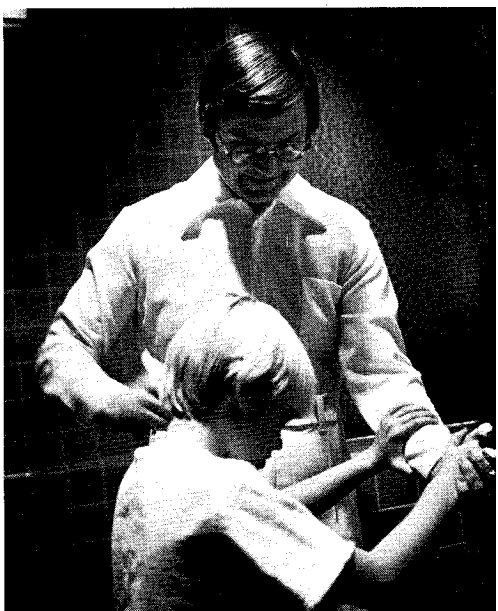


水の中に入るときに，
お父さんが助けてくれます。

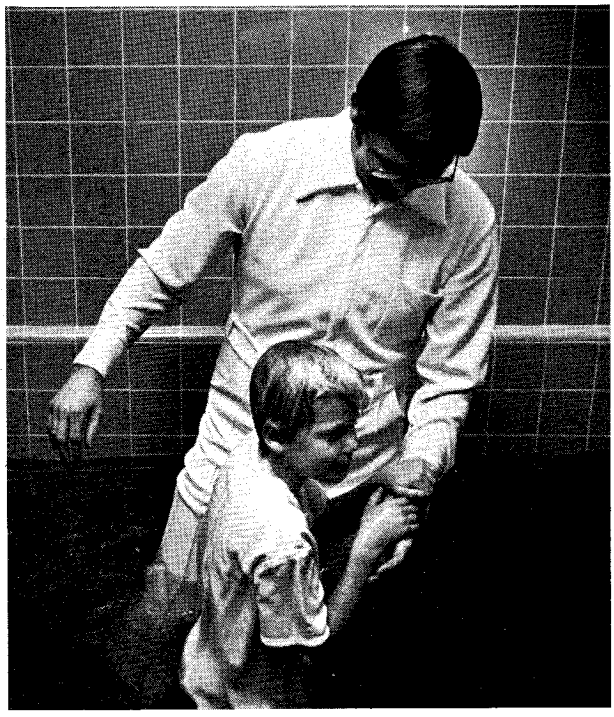
10

11

そして，
どうすればよいのか
おしえてくれます。



12 おとうさんが右手を
ちょっかくにあげて
おいのりのことばをいいました。
そしてコリーを水にしずめました。



13 コリーのかぞくは
とてもよろこんでいます。
おじいさんやおばあさんも
よろこんでいます。

バプテスマがおわって,
コリーはおとうさんと
水からあがりました。
あすのだんじき日に,
コリーはせいれいのたまものを
うけるのです。

14

レーマン人の住むニーファイの地に，「ろうやが火事だ」という知らせが伝わりました。人々はろうの中にいるリーハイとニーファイがどうなったか見ようと，四方から集まって来ました。ちょうどこの日，ふたりは殺されることになっていたのです。リーハイとニーファイは，神の言葉を伝える宣教師でした。ろうやに入れられる前，ふたりは八千人ものレーマン人を神の教会へ導きました。そして，そのためにふたりはレーマン人の兵士に捕えられ，何日間も何の食べ物も与えられずにろうに入れられていたのでした。

そしてこの日，兵士たちはこのふたりのニーファイ人のとりこを殺そうとしていたのです。

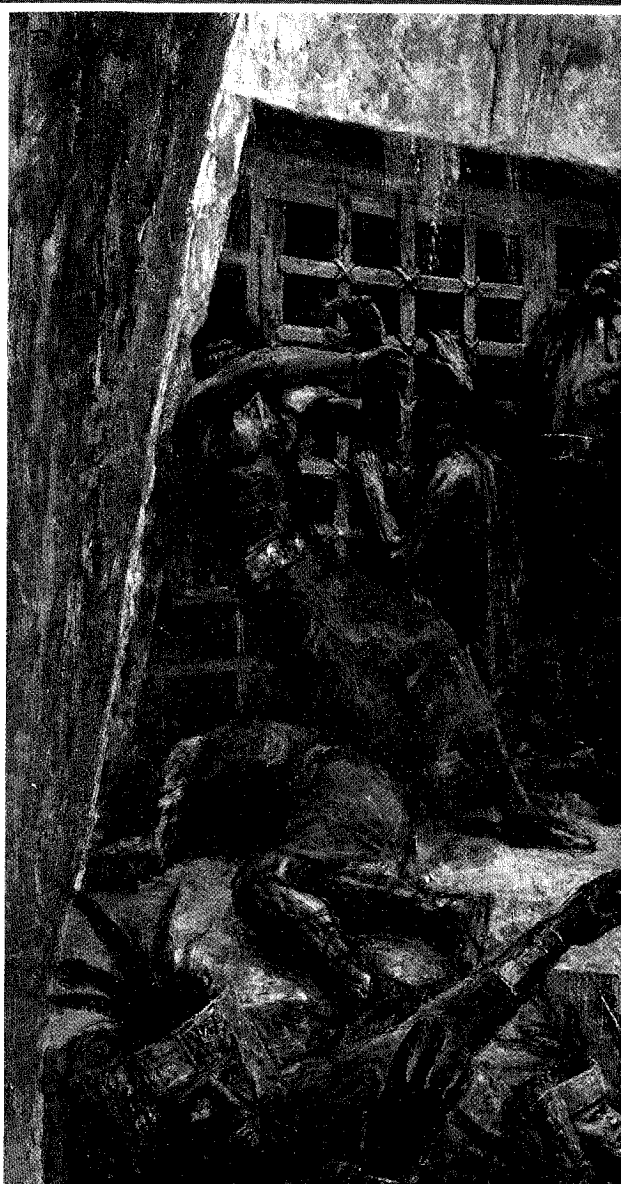
レーマン人の中に，ニーファイ人の血をひいたアビナダブという人がいました。この人は，前に神の教会にいましたが，今はもう教会からはなれていました。アビナダブもまた兵士ややじ馬にまじって，ろうの方へ急ぎました。ろうに着いて，みんなはびっくりしました。リーハイとニーファイが火の柱に囲まれているではありませんか。ふたりをにがさないようにと思っても，暑くてだれも近寄ることができません。不思議なことに，リーハイとニーファイは火の中でもぜんぜんやけどをしないのです。それを見た人々は，おどろいてあっけにとられてしまいました。

ろうの中の生活で，リーハイとニーファイは弱っていました。けれども，神さまにちゅうじつであれば必ず助けられることを知って，勇気をとりもどしました。そして，レーマン人に向かって，「恐れるな。見よ，この不思議を汝らにあらわしたのは神である。汝らがわれらを捕えて殺せないのはこの不思議によっても明らかである」と力強く言いました。

すると，とつぜん地面が大きくゆれて，まっ黒な雲が，空をおおいはじめました。人々はこわくなって，ただじっと立っています。そのとき，まっ黒な雲の上から声が聞こえてきました。「『悔い改めよ，悔い改めよ。汝らに良き音ずれを伝うるため，わが汝らにつかわしたる僕らを亡ぼさんとすることを止めよ』」

火の柱

お話
マーベル・ジョンズ・ガボット



それはかみなりの音ではありませんでした。まるでだれかがささやいているようなやさしい声でしたが，人々の心の底までさし通すようでした。

またそのやさしい声は地をはげしくふるわせ，ろうやのかべはゆれて地面にたおれそうになりました。

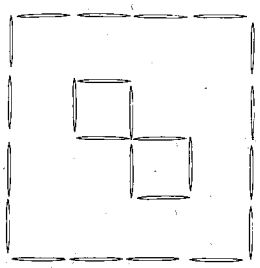
この声は3度暗やみから聞こえてきました。レーマン人たちはこわくて動けません。このとき，アビナダブがふり返って，黒雲をすかして見るとリーハイとニーファイの顔がひかりかがやいていました。

アビナダブは人々にそれを見るように言いました。そしてリーハイとニーファイの言った言葉を信じ，悔い改め，イエスさまを信じるようにとさけんだのです。そこでレーマン人たちは主を信じて心から主に祈り始めました。するとどうでしょう。黒雲は消え，火の柱がそこにいるみんなをとり囲んでいました。

神さまのきよいみたまが天から下ってきて，みんなの心の中に入ったのでした。そして心があたたかくなって，みんなはすばらしいことを語ることができました。

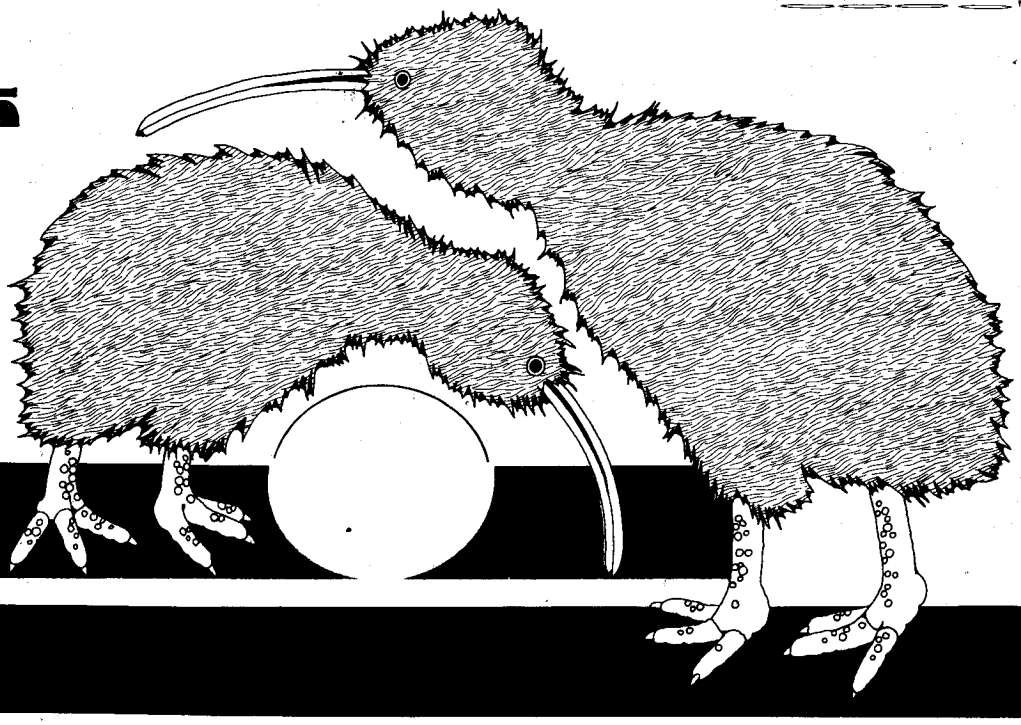
すると，またさきほどの声が聞こえてきました。「『心を安(やす)んぜよ。汝(なんじ)らは創世(そうせい)の前より在(あ)りしわが深(ふか)く愛(あい)する子を信ずる故(ゆえ)，心を安んぜよ』」

p.405の答え



おかしな鳥

おはなし：
ジョン・ラブランド



鳥の美人コンテストがあったら，ニュージーランドに住む，キーウィという鳥は，いちばん先に，しっかくしてしまうことでしょう。キーウィは，ほんとうにおかしな鳥です。半分へこんだボールに毛をはやしたような顔。それに，ほそくて長いくちばし。キーウィの住み家は，森の中です。

キーウィのおかしなところは，顔だけではありません。ほかにも，ふつうの鳥といろいろちがいます。毛はうす茶色で，尾がありません。おまけに，空もとべません。だって，はねがないのです。はねのかわりに，こぶがあるだけです。はなも，おかしなところにあります。くちばしの先についていて，それで食べものをさがします。

おとなのキーウィは，にわとりくらいの大きさです。でも，たまごは，にわとりのたまごの8こ分もあります。体にくらべて，とっても大きいですね。

たまごがひなになる日数ですが，にわとりは21日くらいです。そして，せかいでいちばん大きな鳥のだちょうは，42日もかかります。では，キーウィはどうでしょうか。なん日くらいかかると思いますか。キーウィはほんとうにおかしな鳥です。キーウィのたまごは，ひなになるまでに75日もかかるのです。

キーウィの大すきな食べものは，みみずやこん虫，それにいちごやぶどうです。ながいはりのようなくちばしは，みみずをつつくのに，とてもべんりです。けれども，昼間は土の中の家でねむっていて，夜になると出てきて，食べものをさがすのです。

キーウィは，ほんとうにおかしな鳥ですね。

若い頃，私は油絵に深い関心を持っていた。何時間も鑑賞し，乾いた絵の具の上に今なお残る筆跡を克明に調べ上げたものである。とりわけ私が魅了されたのは，色の混ぜ方と配色の具合であった。

私はとりこになっていた。そして年を取るにつれ，私はもはや自分の気持ちを抑えることができなくなってしまった。あとは実際にやってみるだけである。

私は道具を少し手に入れると，ある晩，家族が皆寝静まった後，遂にその冒険にいどんだ。

私の最初の作品は，美しい風景画の模写であった。丹念に，空の部分から塗り始めた。細大漏らさずに塗った。筆跡さえ，原画に似せようと試みた。そして，空が完成すると，壮大な山の部分に手をつけた。これも筆跡をそのまま写しとった。それから，木，もちろん1本ずつ，それから湖へと筆を進めて行った。キャンバスを，下へ下へと筆を進め，最後に，一番下にほんの少しだけ残った白い部分に草の葉を描き入れて，作業は完了した。

私は両親を起こして，その一大傑作を見せたい衝動にかられた。

実際，絵についてなんの知識も持ち合わせていなかったことを考えれば，作品は悪い出来ではなかった。しかし，その時の私はまだ知識が少なく，湖から反射する色ともとの色が必ずしも調和していないということや，焦点を結ぶ線やサイズの関係がひどく狂っているということに気づかなかったのであった。

私は，大学で美術の講義を受けるようになってはじめて，絵というのはキャンバスの最上部から描くものではない，ということを知った。むしろ，偉大な芸術家は描こうとする場面全体のイメージをはっきりと心の中に描き，それから，そのイメージに添って，ほぼ同時に全体を仕上げていくのである。

ここに1本，あそこに1本と線を描き，ここに少し，あそこに少しと絵の具を塗り，やがて，調和と統制のとれた作品が現実のものとなってくるというわけである。

イエス・キリストの福音を教え，学ぶ際にも，全く同じことが言える。

偉大な教師たち

福音を教える偉大な教師は，機械的に教えたり，型にはまったレッスンをしたりしない。むしろ，生徒が何を学習する必要があるのか，どんな目標に到達しなければならないのかという点に明確なビジョンを描いているものである。教師はそれぞれ

レッスンの準備

—絵画の観点から—

セオ・E・マキーン

のレッスンの方法に柔軟性を持たせなければならない。そうすれば，生徒はそれぞれ，教えられた真理をひとつずつ，自分自身の成長と発達の段階に応じて取り入れてゆくことができる。

生徒が成長するのは，ただ単に教師が生徒に真理を伝えるからだけではない。生徒の方で，その真理を吸収し，受け入れ，従おうとするからである。ちょうど画家が，自分の目の前で常時変化している光景に極めて鋭敏に反応するように，教師というものも，生徒の欲求や気分に応じていくらでも対応できる多様性を身につけておかなければならない。

救い主は，御自分がどのような方法で教えておられるかについて，次のように言っておられる。「われは言葉に言葉を加え，誡命に誡命を加えて，これを世の人に伝え，ここにも少しく教え，かしこにも少しく教えん。故にわが誡命を守りわが勧めに耳を傾くる者は智恵を得るによりて幸福なり。われは受くる者に一そう多く与うれども，われら充分なりと言う者よりはその持てるものさえも取り上ぐべし。」（Ⅱニーファイ28：30）

従って，どんな状況下であっても，教師の教える真理の量というものは，生徒の側の成長と準備の度合によって左右されることがわかるのである。

教師としての私たちの仕事にはこのような柔軟性が要求されるので，私たちがレッスンする際，その取り上げ方を系統立てて準備することが極めて大切となってくる。（「聖徒の道」1977年5月号p.27の「教授と学習の関係」の図を参照）

目　的

私たちがまず第一に関心を持たなければならないのは，これから教えようとするレッスンの目的である。「教える際，私たちには，ある特定の到達目標がある。また計画がなければならない。さらに，目的に細心の注意を払わなければならない。

幸いなことに，教会では多くの教材が準備されている。従って，目的を入念に考慮し，計画をきめ細かく立て，レッスンのテキストによく注意を払えば，だれでも，目的を組織立てて教えることができるのである。」（ボイド・K・パッカー著「熱心に教えよ」より）

レッスンのテキスト

教会で準備し，教え，学習するレッスンにはすべて，目的がなければならない。実際の場面では，その目的を3段階に分けて考える必要がある。作者用と，教師用と，生徒用である。

まず第一に，作者のためのレッスン目的である。作者はこれにより資料や題材を吟味し，選び，組織立てて，レッスンを書き上げる。

次に教師は，そのレッスンの中から目的を取り出し，それを利用して，関係する問題について個人的な準備をする。また教師は，自分の教養，個性，生徒の一般的な欲求に応じて，意味のある言葉でその目的を表現できなければならない。

最後に，目的のあるレッスンをしてもらうことにより，生徒が原則を理解し，自分の生活に応用できるようにならなければならない。そうすれば，生徒は，その目的を自分の個人的な目標の一部とすることもでき，レッスンも意味あるものとなる。

しかし，教えるにしろ学ぶにしろ，その過程は決して努力なしで進められるものではない。何年も前のことであるが，総大会の日曜学校部会で次のような勧告が与えられた。

「予言者ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリは共に翻訳の賜を与えられた。オリバーはその賜を失ったが，啓示にその理由が説明されている。彼は，自分がしなければならないことは神に尋ねることだけであって，それ以上努力しなくとも翻訳はできると考えたのである。彼は，自分自身の心を充分に働かせることもなく，深く考えることもしなかったために，賜が取り上げられてしまった。教師も同じである。……レッスンをひとつひとつ充分に吟味し，それについて神の祝福を請い求め，最大限の努力を払いなさい。賜はその力を増し，間違いなく成功するであろう。」（ホレース・カミングス長老，*Conference Report*「大会報告」1902年10月p.96）

召しの衣を身にまとい

同じ総大会の席上，ジェームズ・E・タルメージ長老は，次のように述べている。

「印象が全く長続きしないような方法で教えている教師たちについて，様々なことが言われている。その原因のひとつは，教師の装いに関係がある。……私はコートの型や帽子の花や羽について言っているのではない。霊の装いについて言っているのである。教師たる者は，その召しの衣を身にまとっていなければならない。……そうでなければ，深い印象を与えることは決してできない。

エライジャの衣がその後継者の手に渡されたとき，その召しにかかわるみたまも伝えられたことが明らかである。私たちは，エライジャのみたまがなければ，何ひとつ成し遂げることはできない。だから，兄弟姉妹たち，そのみたまを求めて，熱心に努めなさい。そうすれば，あなたたちの召しにかかわるみたまは，勤勉に働く力を生み出してくれるであろう。神を恐れるこの勤勉さがあればこそ，人はその召された職で効果的に働くことができるのである。

私は，幹部たちが教師たちに向かい，研究と熱心な祈りとによって自分の職の備えをせよ，あらゆることを主に代わってしていただこうなどと思ってはならない，と呼びかけるのを聞いて，胸が打ち震えるのを感じた。……主のみたまは，それを求める人にもたらされるのである。」（ジェームズ・E・タルメージ長老，「大会報告」1902年10月p.96）

柔軟性のある教え方

レッスンの進め方を計画するとき，準備されているレッスン教材を賢明に利用することができるよう，熱心に努めて，みたまの導きを求める必要がある。

十二使徒評議員会のエズラ・タフト・ベンソン会長は，次のように言っている。

「主の目的，その大いなる目的は，いつの時代も変わることはない。それは神の子らの救いと昇栄である。

通常の場合，主は，包括的な目的や指針は示されるが，その詳細や方法については，私たちが自分で見いだすよう望んでおられる。その方法や手順は，普通，研究と祈りによって，さらにまたみたまのささやきを受けてそれに従った生活をすることによって，見いだしていけるものである。モーセの時代の民のように，霊的に進歩していない人々には，数多くの点で戒めが与えられる必要があった。しかし今日，霊的な面の警告を受けている人々は，その目的をしっかりと見つめ，主や予言者たちから示された指針を調べ上げ，そして「あらゆる事」を命ぜられることなく，祈りの精神で行動している。こうした態度こそ，人が神の如き者となるための備えなのである。

伝道活動でも神殿活動でも，困窮者の援助でも，子供たちを義しく育て上げることでも，その包括的な目的はいつの時代といえども変わることはない。ただ，これらの目的を達成するた

めの方法は千差万別なのである。この神権時代の忠実な教会員は，どの時代に住んだとしても，これらの目的を達成するための義しい方法を見いだしたことであろう。最新かつ詳細な教会全体のプログラムが出るまで待つ必要はなかったのである。

時に主は，子供たちが，自らの意志で行動を起こすことを心待ちにしておられる。そして，行動を起こさない場合，人は大きな報いを失うことになる。その場合，主は，すべてのものを引き上げられるか，その行動を起こさなかった結果生じた苦しみを人に味わわされるか，あるいはまた，もっと詳細にその計画を説明して下さるかすることであろう。しかし，私が恐れるのは，普通，主が詳細にわたって説明せざるを得なくなればなる程，私たちの受ける報いはその分だけ小さくなるということである。」（「大会報告」1965年4月5日 pp. 121—122）

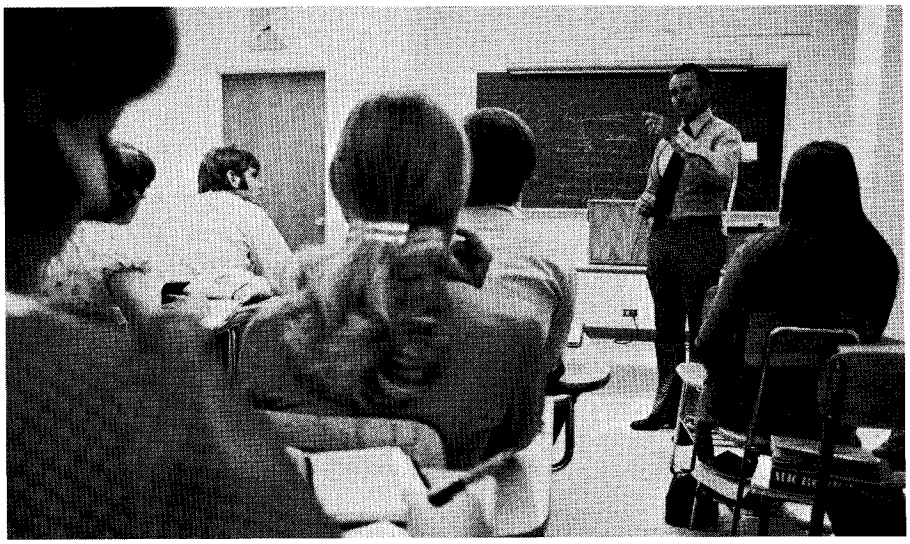
適当な時に適当なことを行なう

「人間をとる漁師」（エレミヤ16：16，マタイ4：19参照）として召されている私たち教師は，何を教えなければならないのかという点に関しては，確固たる決意で，委ねられている業を推し進めなければならない。しかし，レッスンの時間をいかに使うかという点に関しては，みたまの導きに応じて舟の反対側にも網をおろして見るだけの柔軟性は残しておかなければならない。

そうすることにより，私たちはキリストのもとへ多くの人々を連れ来ることができるのである。すなわち，たまたまそれがたったひとりであったとしても，御父の国においてその人と共に受ける私たちの喜びはいかばかりであろうか。（教義と聖約18：15—16参照）

目的をもって教える

ボイド・K・パッカー



教師とは，時間の仲買人である。多くの生徒たちが時間という財産を賢明な方法で投資できるよう援助することが，仲買人としての教師の務めである。そして教師の責任は，一人一人の生徒に，投資に見合った利益配当を得させることにある。

ほかの人の時間の仲買人として働くとき，次のことを考慮してみるとよい。

時間の使い方を入念に監査してみる。これはいつも適切なことである。時間内で達成したいことを，はっきりと決める。言い換えれば，目的を持つということである。

時間を費やした配当として，生徒はどんな考え方や概念を受け取ることになるのか，慎重に判断を下す。生徒というものは，普通，概念や原則は忘れずに記憶しているが，事例を覚えていることはめったにない。

多くの事例の中から，教えようとする概念を充分に説明できるものを選び出す。事例は，概念を伝えることのできる数だけあれば充分である。それ以上多くの事例は必要ない。

まず教会のクラスで効果的に始める。短い，胸を打つ祈りを捧げることは，生徒に心の準備をさせる意味で，賢明な時間の使い方である。しかし，この後すぐに，何か生産的な行動が伴わなければならない。

教師が時間を全部独占した場合，どんな益があるかよく考えてみる。最も賢明な教師というのは，時間の大部分を生徒に割り当て，生徒がその時間を賢明に使う手助けをする教師であると言えないだろうか。

レッスンをしている最中，時間にも気を配る。レッスン，単元，課程を通じ，絶えず，系統的に進めるよう努める。

機敏で有能なクラスの経営者には，二重の配当がある。深い印象を受け，しかもよく訓練の行き届いた生徒という形でもたらされる配当である。生徒といえども，無秩序な時間の浪費のつき合いは好まないということを忘れてはならない。

時間厳守は，教師にとって欠くべからざる特性である。これは必要な資質であって，あればよいといったものでは決してない。

クラスを運営する上で，最も効果的な技術のひとつは，教師は生徒の時間を貴重な時間と考えているものだという印象を，生徒に植えつけることである。出席簿を読み上げることに毎回5分ずつ費やしたとすれば，一年では4時間10分となる。有能な教師なら，クラスの補助を召すことによって，この時間を1時間半にも，あるいは実質それ以下にも縮めることができる。出席調べ，用紙の配布，開始の遅れ，不必要と思われる事務的な仕事，こうしたことによって恐らく，平均するとレッスン時間の20パーセントはむだに使っていることになろう。実際，数多くの大学の課程で定められている時間よりもはるかに多いのである。日曜学校の教師は，毎年出席調べに費やしているこの

4時間を，他のことに使えることだろう。

レッスンの準備

福音のレッスンは，本質的には，態度と行動のレッスンである。そしてレッスンで用いる事例も，意味付けに必要な，単なる手段でしかない。

クラスに出席する大勢の生徒の時間を効果的に運用するためには，教師の側で多くの準備を要する。レッスンで使う事例は，機械的なわく組みを構成するものであるが，これは日常の学習を通じて修得されるものである。

綿密な準備，また「仕上げ」の準備は，いつも，何か他のことをしている間にできるものである。手仕事をしているとき，旅行中，待合せの時間，こうした時間に，よく気のつく教師なら，明日のレッスンの準備をする。そのほか，自然や生活を細かく観察し，祈ることによって，将来のレッスンのために，全般的な準備をもするのである。

救い主は，そのたとえ話や教えの中にうかがえるように，たびたび祈り，黙想と観察をよく行なわれた。

偉大な教師は，絶えず自分の時間を賢明に使うものである。文学作品について驚く程の知識を持っており，そのために彼のレッスンは楽しいと賛辞を贈られた教師がいる。それに対して彼は，その知識の大部分は，すきを引いている間に暗記したものであると答えている。また，たとえ話や物語の尽きぬ宝庫を持っているのではないかと思われる程の教師がいた。ところが彼も，その大部分は他の仕事をしている間に貯えたものであると言っている。

聖典の中で「終始生命の言を心に蓄うべし。さらば必要の時に当り，すべての人に適いたる言うべき言を与えらるべし」(教義と聖約84：85）と命じられていることは，イエス・キリストの福音を教える教師にとって，極めて意味深いことである。心の中で，絶えず観察と黙想と祈りをするように努めなさい。さらにまた，そのように準備したことを少しでも記録に留めておくことができるように，紙と鉛筆を身近な所に置いておきなさい。時間と同様，それはすぐに，しかも完全に消えてなくなってしまうものだから。

教える際，私たちには，ある特定の到達目標がある。また計画がなければならない。さらに，目的に細心の注意を払わなければならない。

幸いなことに，教会では多くの教材が準備されている。従って，目的を入念に考慮し，計画をきめ細かく立て，レッスンのテキストによく注意を払えば，だれでも，目的を組織立てて教えることができるのである。

概　要

私が常日頃考えていることは，まず最初に，コースの概要を説明すれば，生徒は随分助かるのではないかということである。生徒が，そのコースあるいはそのテーマの概要をつかんでいれば，教師はさかのぼって教えることも，詳細にわたって教えることもでき，もっとはるかに多くのことが教えられるからである。

生徒は，自分の行き着く先を知っていれば，それに添った情報を集めることもできる。クラスに出席することは，生徒にとってはるかに意義深いことになるし，さらにまた言い換えれば，生徒は心の中に目的を持つようになるということである。

生徒に計画を示す

もし私が事業所やショッピング・センターの建設を請け負ったとしたら，私は間違いなく，その作業に従事する人全員に，その建築計画の青写真を見せることであろう。多分，詳細な計画書や設計図の一部は，その筋の専門家以外にはそれほど関心がないかもしれない。しかし，それでも私は，すべての人に，完成予想図を見てもらい，最終的にどのような建物になるのか，知っておいて欲しいと思う。そうすれば，作業に従事している人は，少なくとも，自分の仕事が全体の中のどの部分にあたるのかを知ることができるからである。

明確な目的

賢明な教師は，どんなレッスンを準備するときにも，心の中に明確な目的を抱いているものである。あらかじめ，自分が教えたい事柄と，またそれをなぜ教えたいのかを決めておく。例えば，予言者ジョセフ・スミスの殉教とブリガム・ヤングの継承について，教会歴史のレッスンをする際，生徒の生活に全くかかわりのない方法で教えることも可能である。しかし，教師が明確な目的を持っていれば，そのレッスンを生徒にとって意義深いものにすることもできるであろう。

レッスンを私たちの生活に結び付けて教えることが大切である。

「それであるから，私は兄弟たちに『この予言者の言葉を聞け。イスラエルの家の残った子孫であって，元木から折りとられた枝であるあなたたちよ聞け。イスラエルの家のすべての者に書かれた予言者の言葉を聞き，あなたたちが別れて来た兄弟たちと同じ様に望みを抱くためにその言葉を自分たちに言った言葉と考えよ。この予言者はそう言う風に記しているからである』と言って聞かせた。」（Ｉニーファイ19：24）

それがどうなの？

教えられている内容が私たち自身の生活に直接結び付いたものでなければ，特に若い人々にとって，それは大して意味がないものと映るかもしれない。例えば，若い人々は往々にして，旧新約聖書や教会歴史の中の出来事と，自分たちの現在の生活との間に深い関連を見いだせずにいる。結び付きを強める教授法を用いてレッスンを教えるようにすれば，生徒はもっと喜んで自分たちの生活にそれを応用することであろう。

ある教師は，レッスンの準備をしながら，必ずテストをしていた。心の中に，ひとりの生徒が「それがどうなの。ぼくたちの生活にどんな関係があるの」と言っている場面を想像したのである。そして，その教えやレッスンが，どのように現在の生活に関係しているかということについて，説明を試みたのである。これによってこの教師の準備の質も，レッスンの方法も変わった。

教師が，過去の出来事と現在の出来事との間に橋をかけることができれば，若い人々の生活はもっと良くなるであろう。

それを使う場面が，クラスか，家族か，説教か，短い話かを問わず，次のような短い公式に従って目的を書き出してみることは，教師にとって価値あることである。

まず最初に，自分が教えたい事柄を決める。それから，次のように書き加える。

＿＿＿＿＿＿その結果＿＿＿＿＿＿

右側の空欄には，教えた結果としてクラスの生徒に期待することを何か書く。

例えば，今，10代の女生徒に神権の回復についてレッスンしていると仮定してみよう。すると，その公式は次のように埋めるとよい。

レッスン名：　神権の回復
目　　的：　神権が，権能をもつ天の使いによって回復されたことを示す。
その結果：　少女たちは，自分の今交際している青年を励まして，神権会にきちんと出席することを優先するように言う。

この方法を使えば，クラスの中で，これまでとは趣を異にした内容を扱うことになろう。少女たちが実際に行なえる事柄を示し，レッスンの内容に重みを加えることができるからである。

こうすれば，現実の生活に結び付く。クラスでは，その少女たちの今交際している青年たちについて，何か一言述べることもできる。どうすれば若い男性を神権会に出席するよう励ますことができるか，ということについて話し合うこともできる。生徒たちを現に今取り囲んでいる環境や，現実に存在する事例を，レッスンの中に持ち込むことができる。歴史上の出来事だけを使うことはないのである。

レッスンのテキストに忠実に従い，歴史上の出来事を正しく教えても，なおクラスの若い姉妹たちから「それが私にどんな関係があるの」という声を聞くことがある。自分のレッスンに「その結果」という項目をつけ加えたら，必ずレッスンの中に生徒に関心のあることを取り入れるようになるであろう。……まず生徒と直接かかわりのある現実の生活のことから話を始め，それから，慎重に山の頂まで連れて行くようにするとよいであろう。そうすれば，その頂から，はるかかなたの世界を見下ろして教えることができるからである。

1938年，J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は，「教会教育の海図」と題し，聖典を豊富に引用して，教会で教育に携わる人々の目的について話をした。

「教会は神の神権組織である。神権は教会がなくとも存在できるが，教会は神権がなければ存在できない。教会の使命は，まず第一に，物質的にも霊的にも完全な生活を送るよう各会員を教え，励まし，助け，保護することである。これは，福音書の中で，救い主が「それだから，あなたがたの天の父が完全であられるように，あなたがたも完全な者となりなさい」(マタイ5：48)と言われたそのままである。第二に，教会員が全体として，福音の教えに添った生活をするよう，物質的にも霊的にも，支え，教え，励まし，保護することである。第三に，雄々しく真理を宣言し，すべての人に悔い改めるよう，また福音に従って生活するよう叫ぶことである。「すべてのひざをかがましめ……ことごとくの舌はイエスはキリストなりと告白すればなり。」(教義と聖約88：104)

これを推し進めるために，教会としても，個人としても，教会員全体としても，次のふたつの重要な点を見落としたり，忘れたり，おおい隠したり，捨ててしまったりすることがあってはならない。

第一に，イエス・キリストは，神の御子であり，御父の肉身の独り子であり，世の創造主であり，神の子羊であり，世の人々の罪の犠牲であり，アダムの罪の贖い主であるということ。また，十字架にかけて殺され，その霊が肉体を離れて亡くなられたこと。また墓にその身を横たえられ，3日目に霊が肉体と再びひとつとなり，再び生ける者となられたこと。また復活して墓からよみがえり，完全な御方となって，復活の初穂となられたこと。その後，御父のみもとに昇られたこと。さらに，キリストの死のために，また主の復活により，時の初め以来この世に生を受けた人々は皆，同様に文字通り復活するということである。この教えは，世と同じくらい古くからある教えである。ヨブは言った。「わたしの皮のうじがこの体を滅ぼしたのち，わたしは肉に在りて神を見るであろう。しかもわたしのこの目で見るであろう。わたしの見る者はこれ以外のものではない。」(欽定訳ヨブ19：26—27)

復活体とは，骨肉の体と霊からなる。ヨブはここで偉大な永遠の真理を宣言している。こうした疑いのない事実を，そしてそこから必然的に生じる他のあらゆる事実を，教会員たる者はすべて，心の底から完全に信じていなければならない。

私たちが完全に信じていなければならない第二の点は以下の通りである。御父と御子が，実際に，疑う余地なく，森の中の示現で予言者ジョセフにみ姿を現わされたということ。その後，天の示現がジョセフや他の人々に示されたこと。原始教会の背教によって失われていた福音と，神の御子の神権の聖なる神権が，真実，この地上に回復されたこと。主が，ジョセフ・スミスの働きを通じ，再び主の教会を設立されたこと。モルモン経は，その内容が示すままの書物であること。予言者に対して，教会と教会員を導き，支え，組織し，励ますために，数々の啓示が与えられたこと。予言者ジョセフの後継者たちも，同様に神により召され，教会の必要に応じて啓示を受けたこと。さらにまた，既知の真理に従っている教会や教会員たちがさらに必要とした場合，なお啓示を受け続けること。この教会は，正に，末日聖徒イエス・キリスト教会であること。教会の基本的な信条は，信仰箇条に述べられている律法と原則に表わされている。こうした事実も，またそこから必然的に導き出されるものは皆，どれひとつとっても，変更や修正されることなく，固く立っていなければならないものである。また、削除，弁解，言い訳，取り消しも許されない。うまく言い抜けたり，おおい隠したりすることもできない。以上申し上げたふたつの偉大な信念がなければ，教会は教会でなくなってしまうことであろう。

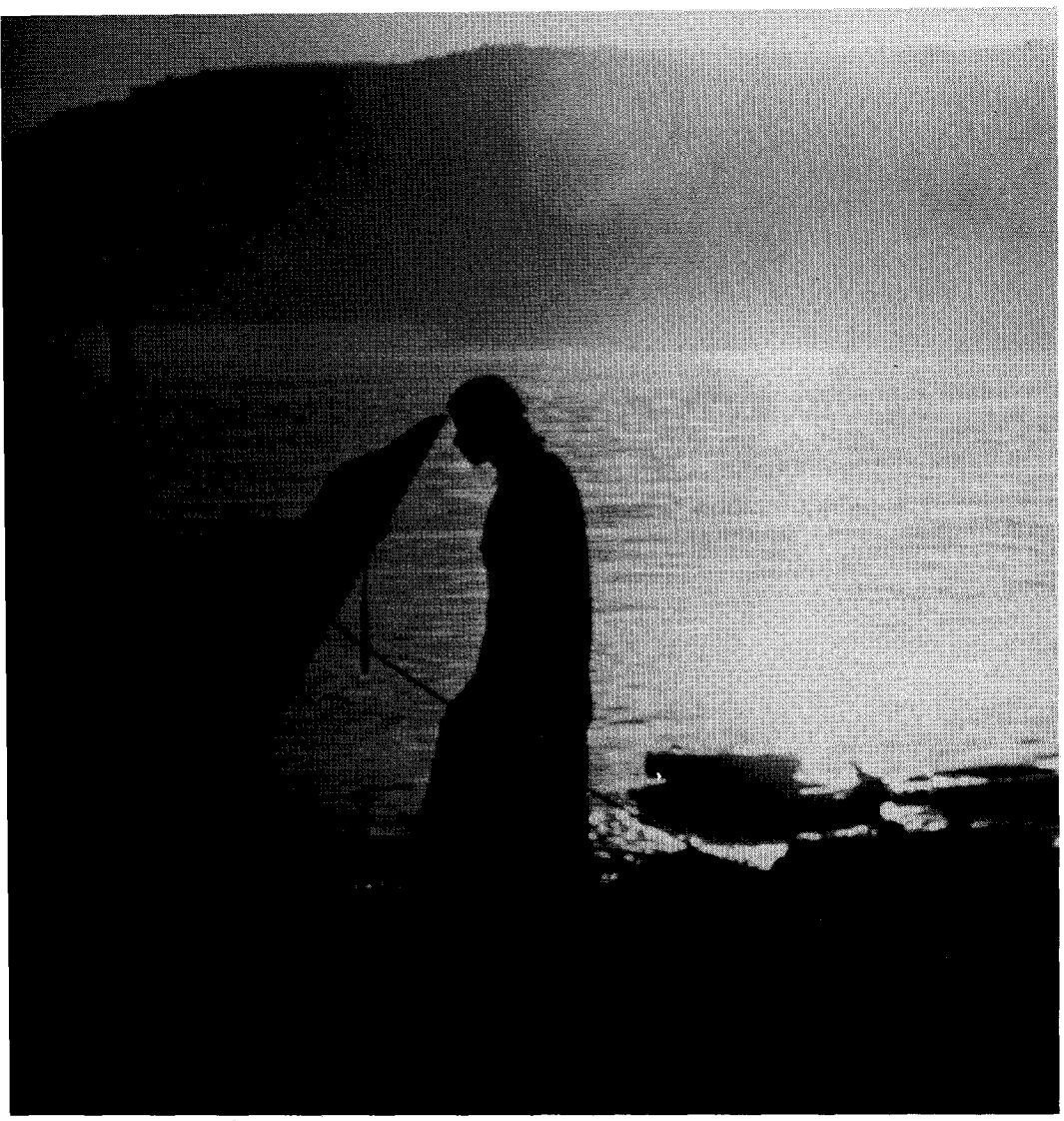
ナザレのイエスに関する教えや，福音と聖なる神権が回復されたことを完全に受け入れない人は，末日聖徒ではない。何千何万という信仰深い，神を恐れる男女が，この偉大な教会の会員となって，今申し上げたことを心の底から完全に信じている。そして，この信仰のゆえに，教会とその組織を支えているのである。

私がこのように申し上げたのは，これが，この世にあっても永遠の世にあっても，教会のあるべき立場を示しているからである。この真実の立場を知っていれば，私たちは必要とあらば，自分たちの態度を変えることもできる。真の進路に修正することもできる。ここで，パウロの言った言葉を思い出してみることは賢明なことであろう。

『しかし，たといわたしたちであろうと，天からの御使であろうと，わたしたちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら，その人はのろわるべきである。』」(ガラテヤ1：8)

大管長会を代表するクラーク副管長のこの話は，教会の教師のための声明書のように思える。私がこの話を丹念に読み返さずに過ごした年は一度もない。教会のすべての教師に，この話の全文を読むよう勧めたい。

親であれ，教会の教師であれ，私たち全員が，ここに述べられている堅実な勧告と知恵に従えるように，また重要な福音の原則を教える方法を改善できるよう，祈ってやまない。

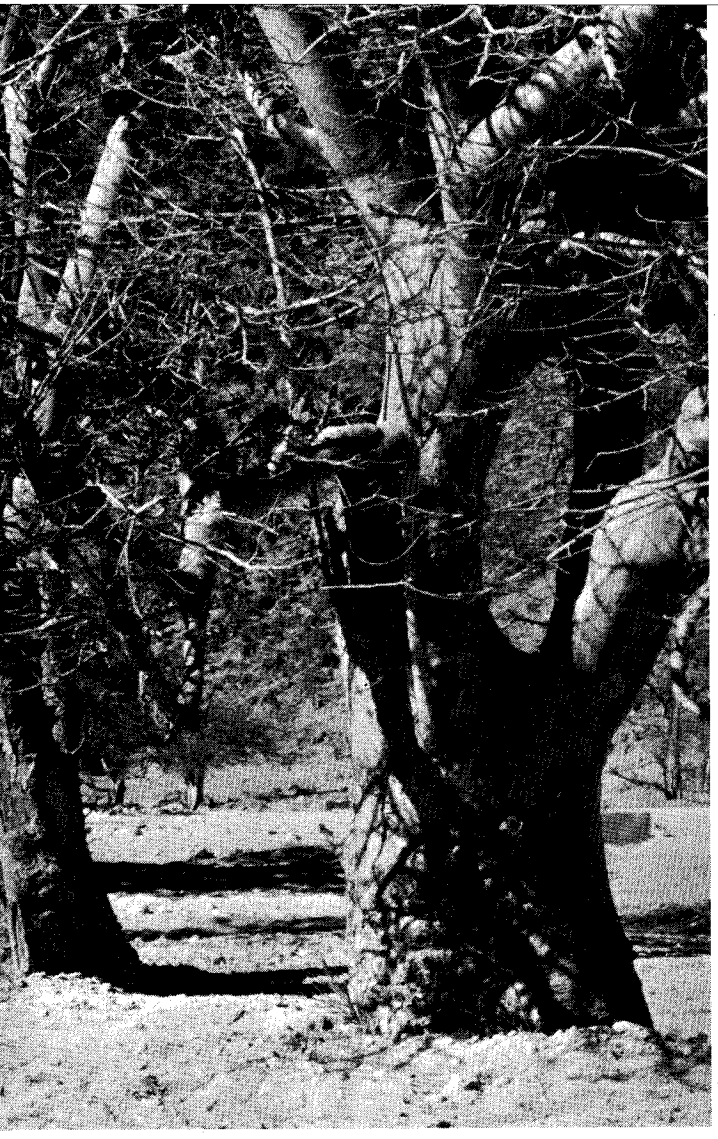


サララの海岸の日没。ニーファイが船を造ったと思われるこの入り江を，今も漁船が出入りする。

リーハイの道を求めて

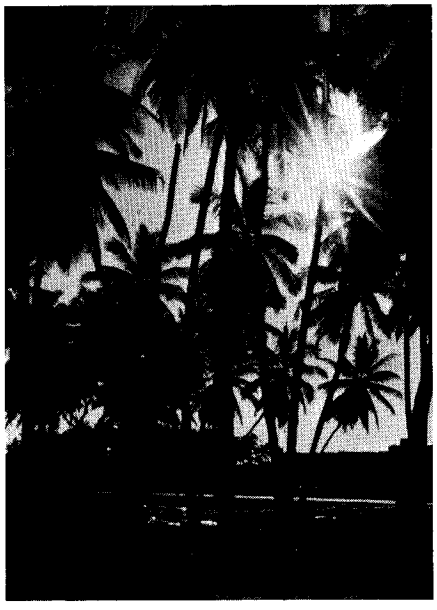
——第3部——

リン・M・ヒルトン，ホープ・A・ヒルトン
写真：ジェラルド・W・シルバー



サララのエジプトいちじくの木。アラビア南岸ではこの地のみで生育し，材木として使用可能な大きさになる。

▲没薬（大きく黒い塊）と乳香。いずれも，エルサレムの神殿や中東の宮殿で香としてたかれた。



◀アラビア南岸では，サララにのみ季節風のもたらす激しい雨が降り，しゅろの木や他の熱帯植物が繁る。

バウンテフル

私たちはドホファルのサララに入る査証を得るのに苦労したが，幸いにもそれを入手することができた。（図6参照）一度合衆国で査証の発行を申請したが，そのとき数カ月後に丁重ではあるがきっぱりと発行を拒否された。ドホファルはオーマンとイェーメンの間で領有権が争われており，旅行者にとって安全な場所ではなかったためである。そこで私たちはオーマンのマスカットに到着すると，情報相を訪ねた。情報相は若く，流暢な英語を話す人であった。私たちは彼に，サララにある大きな樹木を見るためにアメリカから来たことを告げた。それは，私たちが持っている古代の書物に，あるセム族の家族が，多分この木を材料にしたものと思われるが，船を造ってアメリカに渡ったこと，そしてその子孫がアメリカ・インディアンになったことが記されているためであると，入国したいわけを説明した。情報相は非常に驚いた様子であった。

「サララは私のふるさとで大きな木がありますが，そんな話は聞いたことがありませんねえ。」 彼は，マスカットにある合衆国大使館から紹介状をもらってくれれば，戦闘地区に入る通行許可証を発行しようと言ってくれた。それで私たちは紹介状をもらってきた。しかし状態が悪化していたため，飛行機で行って1日だけ滞在し，翌日に帰ってくるように告げられた。サララに24時間しか滞在できないことで，当然のことながら私たちは内心がっかりしたが，しかしその通告に気げんよく同意した。後でわかったことだが，私たちがマスカットに到着する前日に反乱軍の指揮官がオーマンの君主に降服し，13年間にわたる敵対関係に終

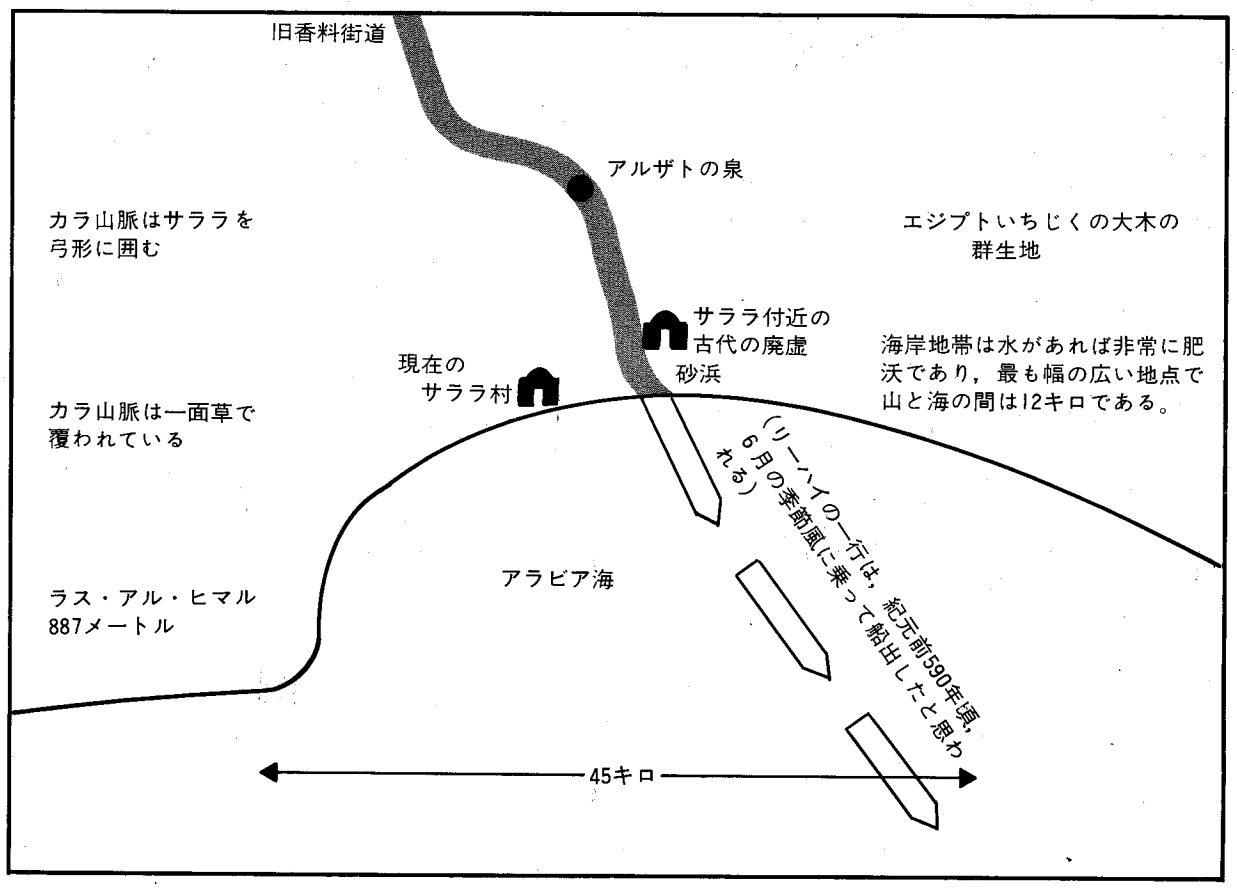


図　8
オーマン，サララ（バウンテフルとみなされる）

止符が打たれたのだった。このようにして，オーマンに到着した2日後に，情報相は戦闘地区に入る許可証を快く発行してくれた。

「私たちは……海辺に着いて……非常によろこび」とニーファイは記している。さらに「果実と野蜜が豊にある」ことで，この地はバウンテフルと名づけられた。「しかもこれらのすべては私たちが亡びぬように主が備えたもうたのであった。私たちはここで海を見てその名をイリアントムと名づけた。これを解けば多くの水という意味である。

私たちは，天幕を海辺の近くに張った」（Ⅰニーファイ17：5－6）と言っている。

ニーファイはバウンテフルに着いて喜んだが，私たちもサララに行けたことを喜んだ。合衆国を発つ前に行なった調査で，私たちは，ここが2,200キロに及ぶ半島の南側の沿岸で木が成育するに十分な湿度のある唯一の場所，正にニーファイの記事に出てくる古代のバウンテフルの地であると結論していた(図8参照)。この時ほど昔の物語の情景が生き生きと私たちの心に浮かんできたことはなかった。私たちは海岸を歩きながら，ニーファイはここで兄たちに，旧約聖書に出てくる，イスラエルの子らをエジプトから導き出した奇跡について説明したのだと考えた。またニーファイは，モーセの民と同じように主が奇跡を行なって一行を海を越えて約束の地へ導かれることを信じていた。そしてこの海辺でその証をしたものと思われる（Ⅰニーファイ17：23—32，49—51)。

古代の香料街道は砂と砂利の平原の中を通って，カラ山脈の北側に達し，弓形をしたサララの海岸沿いの平地に至る。この平地は最も幅の広い所で12キロである。カラ山脈がこの小さな平地を囲むようにそびえている。そして山々の南側の坂は季節風がもたらす雨で草木に覆われている。しかもこの季節風はアラビア半島の南岸の中でもここにだけ上陸するのである。

何本かのワジがこの海岸沿いの平地に注いでいる。一行が2，3年定着して食糧を貯え，船を造ったのは，大きな泉のあるエイン・アルザトであったと思われる。リーハイがこの泉を選んでいれば，泉の水を灌漑して作物を育てていたことだろう。ニーファイははっきり「多くの木の実」と「種子」を食糧の中にあげているが，一行はこれらのものをバウンテフルで入手したに違いない(Ⅰニーファイ18：6)。

当然のことながら，もしサララがバウンテフルであるとする私たちの結論が正しければ，そこにいたのはリーハイの一行だけではなかったはずである。ここは乳香の木が生育する香料街道の終着点である。従ってここには農夫や商人がおり，宿屋があって，商いやその他の活動が行なわれていたことだろう。街道を旅した商人の外に船員がおり，船もあったであろう。というのは，サララは港でもあったからである。船が西から北から，また東から，さらにユダヤからも，この小さい港に盛んに来ていたと思われる。

乳香の木の生育する広大な原野は，水の豊かなカラ山脈の南側の傾斜地ではなく，北側に広がっていた。サララの海岸線の平地ではワジから水が得られる所ではどこでも青々と草木が茂っているが，それ以外の所は不毛である。山の傾斜地は全面腰までの高さの草と大きなエジプトいちじくの木立で覆われていた。ライフル銃を背負った私たちのガイドの話によると，雨期には谷は霧に包まれ，雨が降るので，草木は豊かに繁茂し，熱帯的な観を呈すると言う。丘陵地帯に咲く野性の花に同じく野性の蜜蜂が群がる。蜜蜂の巣が樹木のうろの中に幾つもあるのが見られた。

「ペリプラス」の著者の言葉から，ドホファルの気候が過去2千年間あまり変化していないことが確認できる。「乳香の国（ドホファル）は山地であり，厚い雲と霧に包まれて人を寄せつけない。そして木から乳香がとれる。」（*The Periplus*「ペリプラス」p.33）私たちより前にここに来た探検家も，同じような情景を目にしている。1920年に来たバートラム・トマスは，「木々がうっそうと生い茂るワジ」のことを書いている（*Arabia Felix*「アラビアのフェリックス」p.100）また，ウィルフレッド・セシガーも，「うっそうと茂った木々……丘陵地帯には，英国の公園のかしの木のように大きないちじくの木が風にそよぐ草の間にそびえている」（セシガー，p.47）と描写している。

私たちはセシガーがいちじくの木と書いていたので頭をひねった。というのは，いちじくの木は比較的小さく，また非常に軟らかいので，船を造るのに適していないからである。しかし実際に丘陵地帯を歩いてみて，この木が普通のいちじくではなくエジプトいちじくで，おいしい実のなる木であること，そして堅い木材がとれることがわかった。木の中にあるものは非常に大きく，私たちが両腕をまわしても届かなかった。しかもほとんどの木も高さが15メートル以上あった。この木は非常に弾力性があり，海水に対しても丈夫であって，その上ほとんど節がなかった。エジプトいちじくは今日でも船の建材として使われている。

もしサララが本当にバウンテフルであれば，ニーファイはそこをバウンテフルと呼んだのは肥沃なためであると告げているが，これは決して誇張ではない。水がありさえすれば生命の息吹きが感じられる所であり，ここにいる農夫は1年に10回アルファルファを刈ると言っていた。私たちはその気になれば市が立つほどの果物がなっているのを見た。レモン，ライム果，オレンジ，ナツメヤシ，いちじく，メロン，それにたくさんの野性の花があった。白のジャスミンが木から花輪のようにさがっていた。そよ風の中に花の香りがした。そして牛が山で草を食(は)んでいた。よく灌漑されている所では，草が私たちの背丈より高く伸びていた。

この地がバウンテフルであるとするならば，もうひとつの事柄が満たされなければならない。それは，兄たちがニーファイを「海の深みに」投げ込もうとした崖である（Ⅰニーファイ17：48）。これは砂浜ではおよそできないことである。東の海岸は目の届く限りなだらかな曲線を描いている。しかし，西に目を転じると，サララの砂浜は急にとぎれて，海面から30メートルもそびえる急な崖に変わる。私たちは容易な道を登って崖の上に立った。すると砲座の据えられた要さいがそこにあった。波が激しく岸を洗っているのを眼下に見た私たちは，思わずあとずさりしたものである。このとき，私たちの心に，ニーファイが兄たちから海に投げ込まれそうになったのはここではないだろうか，あるいは近くのよく似た崖からではないだろうか，という声が轟きわたった。

種子や果物，野蜜，崖，船を造るのに適した木に関する問題は解決した。しかし大きな問題がまだひとつ残っていた。それは，ニーファイはどこへ行って道具を造るための鉱石を見つけたのだろうか，という疑問である。サララを出なければならない時刻が迫っていたので，山の中を歩きまわっている時間はなかった。しかし地元の人に聞くと，近くに鉄鉱石の山があるとのことであった。ニーファイの時代に，近くに何もなかったとしても，10日の道のりを旅してヤバル・アル・アクダルまで行けば鉱石を入手することができたであろう。しかしニーファイは，すでに採鉱している鉱山に行かずに，主に導かれるままに自分で見つけたものと思われる。というのは，2つの石を打ち合わせて火をおこし，また動物の皮でふいごを作らなければならなかったと言っているからである（Ⅰニーファイ17：10—11）。もしこの地の人々がすでに鉄工の技術を知っていたとすれば，ニーファイはそのような道具を工夫して作る必要はなかったはずである。私たちはニーファイが何年も前に通ってきた海岸沿いの村や鉄工業の盛んなアカバで何を学んだのだろうかと推測した。ニーファイと同時代の人に鉄工の技術が知られていたことは疑問の余地がない。イザヤ書54章16節は，鍛冶が炭火をおこして鉄鉱石から鋼鉄を作る様子を描写している。アダムの孫のトバルカインは最初の金属細工人であって，この世の歴史の幕開けの時代の人である（創世4：22）。モルモン経の中でアメリカのニーファイ人が鉄と鋼を使っていたことを示す箇所が6つある（Ⅱニーファイ5：15；ジェロム8；モーサヤ11：3，8；イテル7：9，10：23）。ニーファイは当然この有益な技術を子供や孫に伝えたことだろう。

私たちはしばらくの間，ニーファイが造った船を想像し，空想にふけった。近代的な工法に慣れている私たちは，先代の知識を次々受け継いで今日に至っている技術を海岸で見て，一度ならず驚嘆したものである。サウジアラビアのヤンブで船を造っているひとりの人に，設計図はどこにあ

るのですかと聞くと，その人は頭を指さしてここにある，と答えた。この人の頭の中には詳しい設計図が書いてあって，今造っている船の大きさはよくわかっていたし，書かれた図面をその都度見なくても，肋材を竜骨に固定し，厚板を肋材に合わせることも楽々とできたのであった。

ジッダとサララの造船所を訪れて，私たちは造船技術に2つの型があることを知った。いずれもまず竜骨をすえ，肋材を竜骨に固定する。肋材は必要な角度のある木の大枝で作っている。そして板材は釘で打ちつけるか，縫い合わせるかのいずれかの方法で骨組に固定する。最初の工法では，まず鉄製のきり先のついた手動のきりで，板材と肋材に穴をあける。次に大釘の頭の下の本体の部分に油を塗った麻を巻きつけ，これを穴の中に打ち込む。そして大釘の先端は内側で折り曲げて固定させる。

「縫合」工法では，相接する板材に穴を連続して開け，麻ひもできつく縛り，防水処理を施す。板材を肋材に固定するのも同じ方法である。この造船法がイエーメンとオーマンでだけ用いられていたことと，この工法の起源が明らかに古代にさかのぼることを知って私たちは興味を覚えた。釘を使う工法はサウジアラビアのヤンブとジッダで用いられていた。

もちろんニーファイは人の方法ではなく，「主が教えたもうた方法で」船を造った（Ⅰニーファイ18：2）。しかし古代の造船技術を調べた結果，ニーファイが当時の技術に通じていたとして決しておかしくはない。あるいはそれらに通じていたことが十分に考えられる。ニーファイが船を造った地方では，造船技術がよく知られていたし，実際，ニーファイの船は人の方法によるものではなかったが，彼が当時の人々に知られていた方法や型，外観を幾つも取り入れていたことは十分あり得ることである。

ニーファイは自分で木を切ってらくだの力で砂浜へ運んだかもしれないし，あるいは製材された木材を地元の人から買ったかもしれない。彼はどのようにして木材を手に入れたか告げてはいないが，完成した船の出来栄えはよく，「手ぎわが非常に立派」であった，と語っている（Ⅰニーファイ18：4）。

船出した時にはリーハイの移民団の人数は，子供の数も含めて，少なくとも49人はいたと推定される。内訳は大人17人と子供32人である。7組の夫婦に8年の間に平均4人子供が生まれたとして推計し，リーハイとサライアに生まれたもうふたりの息子（ヨセフとヤコブ），さらにイシメルのふたりの息子がエルサレムを出る前にもうけていた子供たちを加えたものである（Ⅰニーファイ7：6）。もちろんこれ以上の子供をもうけていたことも考えられる。そうすると，一行の人数は65人前後に達していたかもしれない。この人数の一行を乗せるには，船は少なくとも18メートルの長さがなければならないと計算した。私たちはこの大きさの船が，私たちの訪れた造船所で，機械の力によらず，図面なしに何隻も造られるのを見た。船には，人だけでなく，一行に必要な果物，肉，蜂密，種子，天幕，個人の持ち物までも積まなければならなかった（Ⅰニーファイ18：6）。18メートルの船は決して大きくはない。今日インド洋や紅海を航行している帆船の多くは，全くの手製で，長さ50数メートルに及ぶ。兄夫婦たちが船の上で浮かれ騒ぎ，はめをはずして歌い踊ったと書かれているところからするとニーファイの船には広い甲板があったはずである。（Ⅰニーファイ18：9）。船が肋材と板材だけからできていれば踊ることはできなかったであろう。ニーファイの船にはおそらく帆と舵，あるいは何らかの操舵装置がついていたものと思われる。というのは，ニーファイは「船の柁をとって」と言っているからである。（Ⅰニーファイ18：22）

18メートルの船を造るのに何日かかるか船大工に聞いてみたところ，彼の造船所では，35人で働いて45日でできる，つまりひとりで働く場合1,575日かかるということであった。ニーファイは初めから終りまでではないにしろ，リーハイの移民団の中の8人の男手を使うことができたであろう。さらに何人かの子供も手伝うことができたと思われる。特にイシメルの結婚していた息子たちの子供は10代に入っていたに違いない。皆で協力すれば，約197日でこの大きさの船を造ることができたであろう。もちろん船がもっと大きければ，さらに長い時間を要したであろう。これは十分あり得たことである。安息日やユダヤ教の祭日には働かなかったであろうし，また皆の助けを得られるようになるまで，ニーファイはひとりで働かなければならなかった。このように見てくると，船を造るのに少なくとも10カ月から1年かかったことが容易にわかる。病気や家族の用事，猟，耕作，収穫等のため，全員がいつもの建造にかかりっきりであったわけではない。このことを考慮に入れると，船を造るのに要した時間は1年以上と見た方が妥当であろう。さらにニーファイは鉄を溶かし，道具を作らなければならない上に，多分自分で木材を切り，形を整えなければならなかったであろうから，船を造るという大事業は2年以上に及んだに違いない。

エルサレムでは生まれ育ったと思われるニーファイにとって，これほど多くの人を乗せて長い航海のできる船を造ることは，正に奇跡であった。ニーファイの国はソロモンの時代に海軍を所有していたが，経験豊かな船乗りを提供したのはツロのヒラムであった（列王上9：26—27）。土師記5章17節はダンとアセルの部族が海に出て行ったことを記しているが，フェニキヤ人とペリシテ人が沿岸地方の大部分を占拠していたので，ヘブル人は航海の経験をする機会がほとんどなかった。ユダの王ヨシャパテがソロモンの没後70年にアカバで造船業を再興しようと試みたが，船は航海に出る前に難破した（歴代下20：35—36；列王上22：48—49）。そのため，ヘブル人は海のことを学ぶ機会にあまり恵まれなかった。

夏の間カラ山脈に命の源である湿気をもたらす季節風が，同時にサララに交易の道を与えていることを，私たちはサララにいる間に確認した。海運の記録がはっきり示すように，10月から5月にかけて貿易風は北東から吹き，6月か

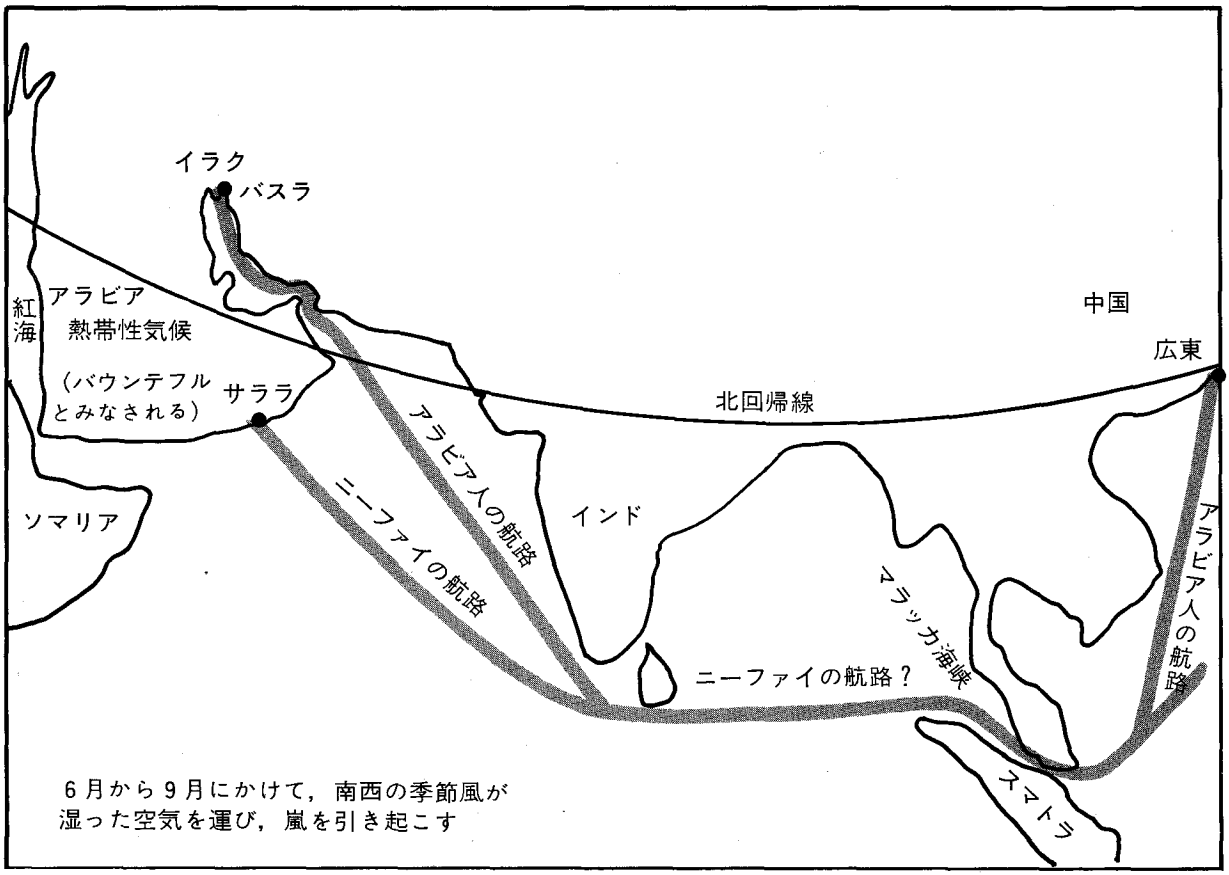


図9　古代のアラビア人の航路と推測される
ニーファイの航路

季節風（紀元6世紀には，マウスル王の指示の下に，アラビア船は季節風にのって，イラクのバスラを発ち，インド洋を越えてマラッカ海峡を経由し，中国の広東まで120日間の航海をした。そのため，西風の吹き始める6月にバスラを出港した。バウンテフルからアメリカまでのニーファイの航路は，バスラ—広東間の3倍に当たる。従って，航海日数は1年ほどかかったと思われる。）

ら9月にかけては南西から吹く（図9参照）。

アラビア南部の沿岸では，リーハイが来る何世紀も前から船が使われていた。アラビア人が沿岸を何百キロも探検していたことは，疑問をはさむ余地がない。しかし最初に公海に出かけて行った人の記録は，紀元1世紀以降まで待たなければならない。紀元1世紀に入って，ローマの航海者ヒパルスはアラブの方から季節風が吹くことを知って，紅海から公海に出てインドに至る新しい交易航路を開いた。この発見を人々は大いに喜び，この地の人々は早速アラビアの沿岸沿いの航海，あるいはホルムズ海峡を越え，インド洋の航海，ハドラマウト沿いの航海，あるいは紅海を北上したり，東アフリカ沿岸を南下したりなど，様々な航海にこの一定方向に吹く季節風を利用した。（*Ghost Ships*「幽霊船」p.26。*Oman in Colour*「色彩豊かなオーマン」英国情報旅行省，オーマンサルタン領について，1974年，p.iv参照）

紀元6世紀には，アラブの実業家たちは帆船でアラビア半島から中国まで航海していた。アラブの船は季節風に乗ってインドのマラバル海岸まで行き，そこからセイロンに渡って（6月から9月にかけて吹く）夏の季節風を捕らえる。そして航行の容易でないベンガル湾を横切って，ニコバル諸島を経由し，マラッカ海峡を通って南シナ海に達する（図9参照）。そしてここから中国の主要な交易中継地である広東まで冒険を伴う30日間の急ぎの旅をしたのであった。アラビア半島から中国まではどこへも立ち寄らずに航海すれば約120日で行けたが，途中食糧を補給するために何カ所か寄って行けば6カ月かかった。（ナンシー・ジェンキンス *"The China Trade" Aramco World Magazine*『中国貿易』「アラムコ世界誌」1975年7—8月号，26：24，26—27）

マラッカ海峡を出た帆船は風に吹かれて完全にコースをはずれ，太平洋で航路を失ってしまうこともあった。「中国

人は（太平洋で迷った）軽率な船員は世界の大洋の排水孔に吸い込まれてしまいこの世から消え去ると信じていた。」（「中国貿易」p.27）

これらの記録はいずれもリーハイがアラビアを発ってから少なくとも500年後に書かれたものである。しかし主の霊感を受けたニーファイが大海に押し出され，その5世紀後までだれも通らなかったと思われるコースを通ることができたのは，沿岸の海運と季節風のお陰であったかもしれない。アラビアから中国へ行くのに後世の船乗りが120日を要したのであれば，ニーファイがその3倍の距離に及ぶアラビアからアメリカまでの海を渡るには1年ないし1年3カ月かかっていたであろう。この航海は信仰と勇気を示す大きな証であり，ニーファイの船の出来栄えを賛辞するものでもあった。その背後にはどれほど胸を踊らせる物語が隠されていることだろうか。

結　論

サララの海岸に立った私たちは，この地こそがエルサレムからバウンテフルまで旅したリーハイの道の終着点であると思った。ニーファイが残した記録の中に何の矛盾も，不合理な事柄も発見されなかった。地理や歴史の本を研究して，この古代の予言者の言葉と矛盾する事柄に出会うこともなかった。むしろ逆に，数多くの資料がニーファイの物語を確証しており，実際に昔そこに存在して旅の困難を経験した者でなければ，あれほどの驚くべき詳細な事柄を記すことはできなかったことがわかる。しかもこの詳細な記述は，2600年たった今日でさえ，私たちが見たものと矛盾がないように思われた。

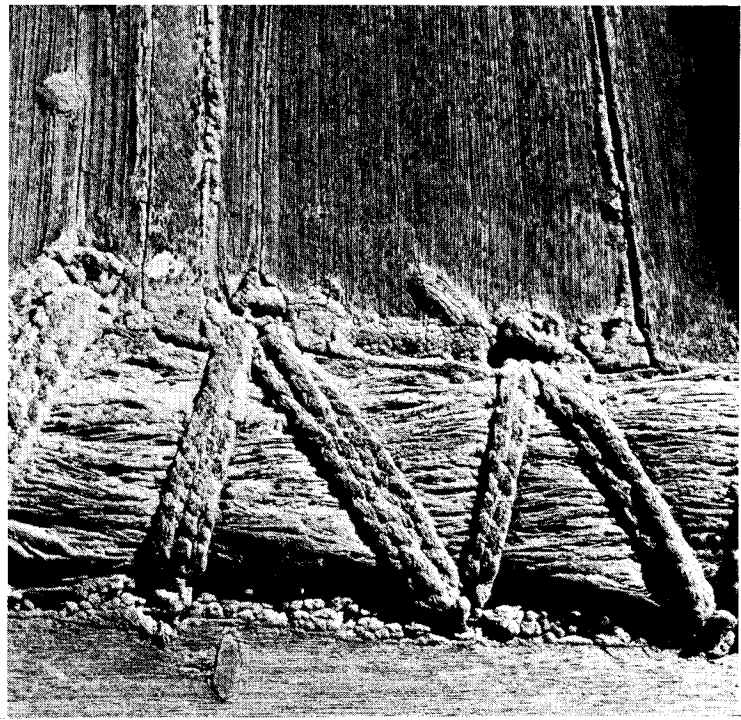
私たちの到達した結論は，仮説にすぎないが（ただし確率は非常に高い）それを掲げると次の通りである。

1．リーハイが紀元前600年に旅をしたアラビア半島は，人の住まない荒野ではなく，多くの民が水の乏しい土地で

手斧を使って船材を加工している船大工。ニーファイもこのような手斧を使って船を造ったことだろう。（写真左）

何世紀にもわたってサララではこのような縫合法による小舟やアラビア船が造られてきた。しかし，他のアラビアのほとんどの地域では，鉄釘が使われている。（写真右下）

ジッダの造船所。この大きなアラビア船は木造で，建造には一切機械を使用しない上に，設計図は船大工の頭の中に描かれている。この大きさの船が，中国，ザンジバル，インドへ歴史的な航海をした。（写真右上）



危険と同居しながらも何とか適応して生活していたのであった。

2．遅くとも紀元前1500年には，アラビア海に面したオーマンのサララで乳香の生産が始まっており，その需要が古代世界で非常に高かったため，交易の街道が幾つか切り開かれていた。人やらくだ，それに情報と富が絶えず往来したので，アラビア半島が中東の他の世界から孤立することはなかった。

3．リーハイが通ったと思われる道とほぼ同じ道を何千人もの人がサララまで旅をしていた。古代の文書に記録された彼らの経験や，文書ほどわかりやすくはないが絵文字に見られる証拠，手で掘った井戸，今日まで続いている伝統がこの旅行の容易でなかったことを物語っている。リーハイの小規模な移民団が無事に旅行できるためには，主の守りが不可欠の要素であった。

4．サウジアラビアのワジ・エル・アファルがレミュエルの谷であって，オーマンのサララがバウンテフルであると言える，確実な証拠を発見したと私たちは確信した。

5．気候と地勢はリーハイの時代以来ほとんど変わっていない。

6．リーハイはアラビアを旅した何年間か，天幕に住んだり，水や食物や移動の手段を捜すに当たって，アラビアの遊牧民族の生活様式を取り入れた公算が極めて高い。

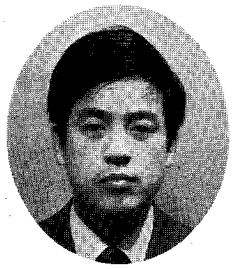
7．南北両アメリカ大陸のインディアンの工芸美術のあるものは，アラビアのセム系の民族に端を発していると思われる。さもなければ，いずれの文化もその源がひとつであると思われる。

8．ニーファイは南方へ旅する途中で冶金と造船の技術を見聞きしたものと思われる。

9．長年蓄積されてきたアラビアの民々の記録と伝統から末日聖徒が学ぶことはまだまだたくさんある。

私たちはこの経験を通して，これまでになくモルモン経の真実性を強く感じた。また旅の途中主の守りと導きがあったことを感じた。そして今，ジョセフ・スミスの大きな功績を証する発見が将来あることを，信仰と期待に胸をふくらませながら待ち望んでいる。

サララの湾の西端にそそり立つ断崖。ニーファイの兄たちが彼を「海の深みに」投げ込もうとしたのは（Ｉニーファイ17：48）この断崖の上からであったと思われる。リーハイの一行はこの湾から約束の地へ向かったのであろう。



改宗をもたらした祈り

日本東京伝道部
専任宣教師
小垂誠二

1973年の12月，あれこれ悩んだ末，私は四年半の間勤めてきた会社を辞めることにしました。新しい人生を歩もうと決心したのです。そして1974年の2月，別の会社に入社しました。しかし，職場を変え，仕事は変わっても，何か心に満たされないものを感じていました。気晴らしに，よく酒を飲みに行ったり，パチンコ屋に行ったり，マンガばかり読んでいました。そうした毎日を送っているうち，いつの頃からか，私は心の中に，だれかにこの「何かわからない気持」を話してみたい，私の求めているものを知りたい，なぜ生きているのか知りたい，と思うようになりました。4月中旬のことでした。私は一宮の家から名古屋にある会社まで，バスと電車で通勤していたのをやめて，会社の近くに下宿することにしました。下宿した第一日目の夜，必要な物を買うため，私は商店街へ出かけて行きました。（この商店街は以前勤めていた会社のすぐ近くにあります）商店を見ながら歩いていた時でした。突然，私の目の前に，大きな人が，それもアメリカ人がふたり立ったのです。そして私に話かけてきました。私は驚きました。でも心を落ち着けて話を聞きました。彼らの言ったことはその時あまり理解できませんでしたが，ふたつのことだけはよく覚えています。ジョセフ・スミスという人について聞いたことと，教会の場所は今住んでいる所からあまり遠くないということでした。私は不思議な出会いだなと思いました。というのは，この場所は，今まで何年間も毎日のように通った所で，しかもこの日が名古屋に住むことになった第一日目だったからです。そして私は何かを捜し求めていたからです。ふたりの外人がだれであるかは，チラシをいただいた時に初めてわかりました。末日聖徒イエス・キリスト教会と書いてあったからです。でも，その時はもう教会に行く約束をしていました。とにかく，このようにして宣教師に会った私は，約束の時間に教会を訪問しました。「彼らは私の知らないものを知っている」と思ったからです。レッスンはとても興味深いものでした。ジョセフ・スミスという少年が，神と御子イエスにお会いした時の話は，私の心を捕えました。しかし，私の心の中には，「これは本当にあった出来事だろうか」という疑いの気持もありました。私はモルモン経を紹介され，祈りについての説明を聞きました。そしてその後，宣教師から「小垂兄弟，お祈りして下さいませんか」と言われた時，私は宣教師の言う通り，祈ってみることにしました。しかし祈り始めるとすぐ，心臓がどきどきして，何を言っているのかわからなくなってしまいました。でも，この経験から，私は祈りを通して疑問を解決することを知ったのです。

改宗をもたらすきっかけとなった最初の出来事は，モルモン経の第3ニーファイ第11章を読んだ時です。宣教師から2度目のレッスンを受けた時，私はモロナイの約束を試したけれども祈りの答えがなかったと話しました。その時の宣教師の言葉を私は決して忘れることができません。宣教師はこう言いました。「小垂兄弟，私に約束して下さい。朝15分早く起きて，身支度をし，お祈りをして，それからモルモン経を1章だけでもいいですからゆっくり読んで下さい。そして，読んだ出来事が本当にあったことかどうか，天父に尋ねて下さいませんか。」私は宣教師と約束しました。そして次の日の朝，いつもより30分早く起きて身支度をした後，会社に行くまでの30分間，私は第3ニーファイ第11章をゆっくり，深く考えながら読みました。私の心は燃えるような感激で一杯でした。私は宣教師に言われた通り天父に尋ねました。熱い，確かに熱い祈りは答えられました。モルモン経の中の出来事は確かに真実だ。私は祈りを通して確信を得たのです。次のレッスンが待ち遠しくてたまりませんでした。宣教師に，祈りが答えられたことを告げたかったのです。次のレッスンは「人生の目的」でした。レッスンはみたまに満ちあふれ，私の心は平安な，温かい気持で満たされました。そして，この日，私は求めていたものを見出したのです。人生の目的を知ったのです。私は真実だと思いました。疑うことができませんでした。

あの時からもう3年たちました。今私は主の僕として，東京伝道部に召されています。「私を導いてくれた宣教師のようになりたい」という気持が，あの日以来いつも私の心を離れなかったのです。

次の改宗をもたらした祈りは，伝道に出てからです。伝道に出て2カ月目ぐらいの時でした。ちょうどモルモン経の中のイノスのように，心が飢えるのを覚えた私は，ひとり暗い部屋に行き，ひざまずいて，心の願いをかなえ，私の罪を赦して下さるように主に祈り求めたのです。どれ位祈っていたかは分かりません。祈っている間，恐ろしい気持を感じましたが，心はいつも温かでした。私は心の中に「罪を赦します。もうしてはいけません。」という声を聞きました。私は，涙が出てくるのを，止めることができませんでした。どれほど感謝をしても，足りないと思いました。私にとって忘れられない経験です。主は確かに生きておられる，この時の私の証は，今でも変わるはずがありません。主は祈りを聞き，祈りに答えて下さいました。伝道中，様々な経験をしましたが，いつも，この時の証に支えられて

きました。私は，末日聖徒イエス・キリスト教会が，キリスト御自身が導いておられる唯一真のイエス・キリストの教会であることを知っています。祈りを通して主と交わることが確かにできます。教会のすべての業は，主のみ業です。真心から謙遜になって祈り求める人に，真理は，止まることなく注がれることを証します。私の家族を含めて，ひとりでも多くの人が，私の受けたと同じ喜びと平安を受けられるように願っています。すべてイエス・キリストの尊いみ名により申し上げます。アーメン。

“信仰はこんなことで崩れはしない!!”

日本札幌伝道部
専任宣教師
栗原裕税

転任，それは宣教師にとって愛する同僚，福音を分かち合う愛する人々との別れです。その一方，新しい任地に対する希望もあるものです。私がまだ雪深い札幌の地をあとに，室蘭の地へ向かうため一抹の不安と期待を抱いて列車に乗ったのは，3月の初めでした。「主は生きておられる……転任があるのは主のみ旨なのだ。」

私が愛する同僚のラーソン長老と共に，小川家族に会ったのは，室蘭に着いた次の断食安息日の朝でした。彼らは私たちを本当に暖かく迎え入れて下さいました。ふたりの娘さんは札幌に出掛けて留守でしたが，彼らは本当に神様の選ばれた家族であると，同僚と私は凍りつく坂道を歩きながら話したものでした。(その頃，日本札幌伝道部では毎朝，鈴木伝道部長の家族と共に全北海道の宣教師が伝道に対する特別な祈りを捧げていた。)

それから小川家族とのレッスンが始まりました。レッスンの時はいつも「みたま」が伴い，私たち宣教師も，福音が真実であることを「みたま」によって深く理解しました。私はいつも同僚と共に，小川家族の進歩と北海道の自然について話し，神様に心から私たちの召しを感謝しました。そして，小川家族はあるひとりの姉妹のバプテスマ会に出席した時から，にわかに信仰が強まり，私たちは4月27日に小川家族の両親と，11才と9才の娘さんふたりと共にバプテスマの水の中に立ったのでした。バプテスマ会は本当に霊的な雰囲気の中で行なわれ，私たちは室蘭支部の会員と共に，この新しく生まれ変わった小川家族を神様の王国に迎え入れたのでした。

ところが突然の悲劇が小川家族を襲ったのです。……バプテスマ会の3日後の断食安息日の朝でした。同僚のラーソン長老と伝道に出掛ける準備をしていた時，電話のベルがけたたましく鳴りました。ひとりの姉妹からの電話でした。「栗原長老，小川家族の長女の麻子姉妹が昨日，交通事故で頭を打ち，重体で入院しています。」信じられない!! なぜ？ なぜ？ ……私たちは，彼らと共に，バプテスマを受けた教会員として初めての安息日を心待ちにしていたのに「なんとむごい……」プライマリーに出席するため，教会への道を急いでいたふたりの姉妹……横断歩道を歩いていたのに。

自転車で病院に向かう途中，「栗原長老，信仰はこんなことで崩れはしない，頑張るんだ!!」そう繰り返しつぶやきながら，必死に神様にお祈りしました。意識不明のまま病室のベッドに運ばれた姉妹に，私たちはすぐに祝福をと思いました。しかし，開頭手術をしたばかりで，私たち一般の者の入室は病院側から固く禁じられていたので，何もすることができず，ただ二重のガラス越しに見ているだけでした。

その様な中で，すぐに伝道部長に連絡をとる一方，断食安息日でしたので，教会員と共にひざまずいて心からの祈りを捧げました。そして伝道部長のはからいで，全北海道の宣教師と教会員は心を一つにして，小川麻子姉妹の回復を祈りました。ソルトレーク神殿で特別の祈りが捧げられたことを聞いたのは，その後のことでした。また教会員でない私の母も，祈りの方法を書いた紙を片手に心からのお祈りをしたと，後で手紙で知らせてきました。

神様は確かに生きていらっしゃり，私たちの祈りに答えて下さいます。私はそのことを心から感謝し，また証します。5日以上も意識不明のまま，病室のベッドに横たわっていた麻子姉妹ですが，ホームティーチャーから灌油の儀式を受けることによって回復に向かい始めました。病院の先生は「若い娘は直りが早いねえ」と言っていましたが，若いからだけの理由ではないことを私ははっきり知っています。今では，麻子姉妹も病院の中を走りまわれる程に回復しました。この出来事を通じて多くの人々が信仰と証を強めました。私も，今はっきりと神様は生きておられ，私たちの祈りに答えて下さることを証します。そして，終始麻子姉妹の看護にあたってとられた小川家族の態度と，忙しい時間をさいて病院を訪問して下さった，アドニー・Y・小松長老御夫妻，鈴木伝道部長御夫妻，その他多くの教会員の皆様の暖かい愛に心から感謝しています。すべてをイエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。

生まれ変わろうと決意

日本東京ステーキ部
浦和ワード部
鈴木　勲
　　敏子

昨年の9月19日の夕方，私たち家族はふたりの宣教師の訪問を受けました。そして，彼らが上手な日本語を話すのに心を引かれて，私たちは宣教師をわが家に招き入れました。

以来，ほとんど毎週日曜日の夕方，宣教師に来ていただき，教会の教えについて学ぶようになりました。

けれども，彼らと話をする際に，大きな障害となる事柄がふたつありました。ひとつは，私が鈴木家の長男で，代々続いた寺の墓地を守らなければならない仏教徒であるという意識。それに，知恵の言葉の教えを守ることが不可能に思われたことです。

今考えると恐ろしいことですが，当時，私は毎日ビールを1～2本，タバコを40～50本口にしていました。

しかも最初の頃は，ビールを飲み，タバコを吸いながら宣教師からレッスンを受けていました。しかししばらく後には，宣教師のいる間だけ，タバコやアルコールを控えるようになりました。

また私たちは時々，何かと口実をつくって宣教師のレッスンを断わり，日曜日の夕方を家族だけで過ごしました。けれどもそうすると，なぜかさびしさを感じるのでした。また前に述べたふたつの障害のために，彼らに会うことを苦痛に感じながら，いざ会ってしばらく話をすると，彼らの帰った後のわが家には必ず，とてもさわやかな空気がみなぎるのでした。それは何とも不思議でした。

そうした間に，わが家を訪れる宣教師が転勤のために何人もかわりました。しかしそのたびに，私たちは少しずつ成長しました。

まず，仏教徒という口実の下に頑固に祈りを拒んできた私たちですが，次第に祈りに参加するようになり，ついには自分で祈るようにさえなったのです。さらに，知恵の言葉の教えも少しずつ理解できるようになって，それまでたしなんできたものを減らすようになりました。

そして今年，5月中旬のある日のこと，いつものようにわが家に来られた宣教師から，突然「おふたりのバプテスマを6月25日に予定しているので準備して下さい」と言われました。そのチャレンジに「はい，準備します」と答えた後で，「さあ，大変なことになった」とふたりで頭を抱え込んだものでした。

この日まで教会に入る気持ちはほとんどなかったのですが，奇しくもバプテスマの予定日が亡父の命日でもあり，それまでに接した宣教師や教会員の方々の模範もあって，私たちはこの日を境に，生まれ変わろうと決意しました。

それからの1カ月間，私たちは数々の難問と取り組み，多くのレッスンを消化しました。酒とタバコをやめることには，まさに「清水の舞台から飛び降りる」程の重大な決意を要しましたが，バプテスマの2週間前までには思った程の抵抗もなく，本当にすんなりとやめることができました。また什分の一を守るのにも勇気が必要でした。

ところが，いよいよあと数日でバプテスマという時に，これまであまり病気をしたことのない息子の啓史が高熱を出し，3日間も熱が下がらないという事態が生じました。けれども，宣教師と教会員の方々の献身的な協力と祝福によって，6月25日の朝にはすっかり回復し，私たち夫婦は心身共に完全にバプテスマを受ける備えをすることができたのでした。

私たちはここまで導いて下さった多くの宣教師と教会員の皆さんに心から感謝を申し述べたいと思います。神様が確かに生きていらっしゃって，私たち家族を見守り，正しい福音の道へと導いて下さったことを証致します。

癒しの賜を得た体験

昨年（1976年）の5月6日のことです。村井ヨシエ姉妹から，お兄さんの灌油の儀式をしてほしいと言われ，私は午後7時半頃教会に迎えに来たタクシーに，長老定員会会長の武内兄弟と一緒に乗り込みました。タクシーには緊張した面持ちで村井姉妹と徳沢支部長が乗っていました。

村井姉妹のお兄さんは，4月23日，祭に集まった兄弟たちを車で駅まで送る途中，無灯火の車にぶつけられて右肺がつぶれ，危篤状態にあったのでした。

私たちは病院に着くと，早速病室に向かいました。しかし，病室は滅菌室になっており，履物を替え，白衣と手術帽をつけなければなりません。ここで私たちはさらに緊張しました。中に入ると，上半身裸で喉に管を通されたお兄さんがベッドに横たわっていました。口には血がにじみ，肩で大きく呼吸しています。

片肺がガスエソで，もう一方が肺炎を起こしているとのことで，高熱が続いていました。あらゆる手を尽くしているが，非常にむずかしいということでした。

支部長が灌油をし，私が結び固めをしました。一年あまりたった今でも，私はその時の祝福の言葉をきのうのことのように覚えています。

私は，妹である村井姉妹の信仰によって儀式を執行することを告げて結び固め，祝福を宣言しました。苦しみから一刻も早く脱することができるように，また，できれば体が回復して日常の生活を送れるようにと祝福しました。祝福を終えた時，私の目は涙で曇っていました。

祝福を施している間，私は病状や場所に対する恐れを全く感じませんでした。神様によって助けられているという確信と，神権を行使していることに伴う自信だけがありました。

その後，お兄さんの状態をおたずねしたいと思いながら，村井姉妹にお会いする機会もなく，数カ月が過ぎました。その間，あのような大けがで危篤状態に陥っていたお兄さんが本当に元気になるだろうか，という気持ちになったこともあります。神様の力や神権の力を疑うというのではありませんが，そんな考えが私の心をよぎったのでした。

そんなある日，村井姉妹の訪問を受け，お兄さんが無事に退院されたことを聞かされました。血タンが少しでるだけで特に異状はないとのことでした。

これまで何度か癒しの儀式を施す機会に恵まれ，神様の力の大きさを知っていながら，なおかつ医者の言葉に影響されて疑いに近い気持ちを抱いた私ですが，この度の体験を通して，神様は実に生きたもうという思いを再び新たにしました。

昔，イエス・キリストが病人を癒されたように，現在も癒しの賜が与えられ，病人が癒されています。主は，主を愛し，その教えに従おうとするすべての人々を不思議な方法で導いて下さいます。神様は確かに生きていらっしゃいます。末日聖徒イエス・キリスト教会は，末日に回復された真の教会です。すべてをイエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。

日本名古屋伝道部
金沢支部
亀井秀明

三四 見よ、召さるる者は多けれども選ばるる者は少し。　選ばるることなきは、これそもそも何の故ぞ。三五そは、人々の心甚しくこの世に属けるものの上にあり、唯々人間の誉を得ることをのみ望み、次の如き一つの戒めを知らざるによる。三六曰く、神権の権能は天の能力と固く結びつきて離るべからざるものにして、天の能力は正義の原則によりてのみ支配し運用し得るものなり、と。三七この権能のわれらに与えらるる事もあらんは真実なり。されどもし己が罪を蔽いかくさんとし、われらの高慢、空しき野望を充たさんと企て、または幾分にても正しからざることによりて人の子らを支配し、統御し、強制せんとする時は、見よ諸天は退き去り、主の「みたま」悲しむ。主の「みたま」退き去らば、神権またはその人の権威は終りなり。三八見よ、その人いまだ覚らざる前、独り置かるるままにとげあるむちをけり聖徒を迫害し神に叛きて闘をなす。三九われら悲しむべき経験によりこの事を知る。およそ殆んどすべての人間は、少し許りの権威を得たりと思うや、忽ち正しからざる支配を始めんとする生れつきの性癖あり。四〇これすなわち、召さるる者は多けれども選ばるる者少き所以なり。四一如何なる権力も勢力も、神権によりて維持する能わず、または維持すべきものにあらず、ただ説服と堅忍と柔和と温情と偽らざる愛とによる。四二また、親切と浄き知識すなわち偽善にあらず奸智にあらずしてその人を甚だ大いならしむるものによる。四三すなわち、聖霊に感動しては機に臨みて激しく人を責む。然る後、また彼の汝を敵視せざらんために責めたるその人に一層の愛を示す。四四かくて、彼は汝の誠実は死のきずなよりも強きことを知るべし。四五すべての人に対して、また信仰ある家族に対して汝の腹中を慈愛にあふれしむべし。絶えず徳を以て汝の想を飾るべし。然る時は、汝の自ら信ずること神の前に強くなりて、神権の教理は天より下る露の如くに汝をうるおさん。四六聖霊は常に汝の伴侶となり、汝の笏は真理と正義の変ることなき笏となり、汝の支配は永遠の支配となりて強いらるることなく永遠に汝に流れ込まん。

教義と聖約121：34—46